

2024年度

摂南大学
現代社会学部
F A L 演習
活動報告書

地域社会で活躍し、
その牽引役となる人材の育成をめざす

摂南大学現代社会学部

はしがき

摂南大学現代社会学部の開設から2年が経ちました。本学部は、FAL(フィールド型アクティブラーニング)科目を最大の特長としています。特に、時に大学のキャンパスから飛び出し、通年で連携先と協働しながら多様なプロジェクトに取り組む「FAL 演習」は、本学部の最も重要な科目の一つです。

2年目を迎えたFAL演習では、昨年度よりも4つ多い45のプロジェクトが開講され、373名の学生が履修しました。プロジェクトのジャンルは、「まちづくり」「福祉」「司法」「自然」「スポーツ」「産業」「多文化」「メディア」「イベント」「労働」「災害・防災」「文化」と多彩です。本報告書に収められた各プロジェクトの報告をご覧いただければ、学生たちの活躍する姿とともに、コロナ禍での多様な社会活動・市民活動の縮小からいかに立直るか、人口減少が進む地域社会をいかに支えどのように新しい価値を再発見するか、衰退する中小企業や第一次産業をいかに維持発展させるか、外国人人口が増加するなかで多文化共生社会をいかに構築するか、生成AIが発展しメディア環境が急速に変化する中で人々にどのように情報を届けるか等々、まさに「現代社会」の様々な課題が浮かび上がってくるはずです。

講義科目では退屈しがちな大学生たちも、地域社会のなかで手ごたえのある他者や地域と出会い、悩みや葛藤を抱えながらも多様な人たちと連携協働する経験の中では、学びへの意欲を取り戻します。教員も、普段とは異なる学生たちの姿を見て、はっとさせられる経験は少なくありません。

子ども・若者が減っていく時代だからこそ、未来への希望として、一人ひとりの若者たちを大切に、その学びと育ちを支えていくことが必要になります。これまで学生たちを支え励ましてくださった皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後さらなる連携の輪が各所で広がっていくことを祈念しております。

2025年3月

摂南大学現代社会学部 FAL 委員会

江口怜

目次

はしがき	1
1. FAL科目の概要と科目一覧	5
1)FAL科目の概要と特長	5
2)FAL科目の一覧	5
2. 数字でみるFAL演習	7
3. 2024 年度FAL演習活動報告	8
フィールドスタディ(FS)への参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える	11
四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」	12
産官学協働による地域課題解決	13
街づくり・公園づくりに参加する	14
都市型公園の利活用を考える	15
まちの面白さを編集・発信してみよう！	16
「子どもの居場所づくり」と「若者が輝けるまちづくり」に取り組む	17
地域の担い手として大学生にできることを考え、実践する	18
学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる	19
アフターコロナ時代の自治会活動継続のために	20
子どもたちの「自己実現」にともに取り組む	21
子どもの声を聴く仕事 ― 困難な状況にある子どもを支援する現場を知る ―	22
河川美化と里山保全から考える持続可能な地域づくり	23
子どもの自然体験教室のサポーター	24
「村・留学」で考える地域社会と生活の未来	25
壱岐ボランティアリズムから社会を考える	26
奈良・御所から人と自然の共生を考える	27
地域資源を活用したスポーツツーリズムの提案	28
バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動	30
球団「兵庫ブレーバース」への支援実践をてこに標準思考から脱皮する「試行錯誤社会学」	32
同窓会型スポーツのイベントマネジメント	33
田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信―「稲武-いなが-」で考える持続可能な地域とは	35
果物好きな若者を増やしたい！	37
組織の抱える問題・課題を解決に導きながら、働きがいを考えよう	38
大阪の”凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい、次世代へ繋げる	39
工場はまちのエンターテインメントだ！―門真のものづくりの魅力を伝える	40
中小企業が抱える経営課題を GDX で解決する	41

あなたの個性を活かした、地域を巻き込む街づくり。 その活動を通じて、違う自分の側面を発見し、自分たちの活動を広げる。	42
夜間中学・識字教室における社会的マイノリティの学びの支援	43
多文化共生・神戸2:在日コリアンが見つめる日本の姿を知る	44
多文化共生のまち、大阪を見つめる	45
三重県いなべ市でのまちかど博物館を活用した地域プロモーション企画	46
大阪府河内長野市滝畑での地域の人達との映像制作ワークショップ	47
京都の市街地で地域の人達と映像番組制作配信を通じた地域活性化の企画	48
まちライブラリー@ちとせでのブックフェスタジャパン 2024 のイベントの企画	49
媒体企業における PR 活動を通じたマーケティングのあり方の検討	50
音声媒体におけるプロモーション・イベントの参加者意識に関する調査	51
地域企業における SDGs 活動への参加	52
地域ネット媒体の役割と若年層に向けたアプローチ	53
SDGs イベントにおけるプロモーションの検討および実施	54
「ふるさと門真まつり」を盛り上げようー楽しいイベントの企画・運営のノウハウを学び、 醍醐味を味わう	55
総合的観光・食イベント「SAKE Spring」の実施を通じたグローバルな産業振興	57
働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム:ワーカーズコープ1	58
東日本大震災・福島原発事故の被災地で考える「地域の未来」	59
人が集い、読書を楽しむ図書館をつくる	60
[参考資料]FAL(フィールド型アクティブ・ラーニング)科目の沿革	61

1. FAL科目の概要と科目一覧

1) FAL科目の概要と特長

FALとは、フィールド型アクティブ・ラーニング(Field-based Active Learning)の略称で、企業、自治体、公益法人等(連携先)と学生が協働し、共有された目標の達成に向けて取り組むプロジェクトであり、FAL科目には「FAL入門」「FAL実践」「FAL演習Ⅰ～Ⅳ」が含まれる。FALについては、現代社会学部における学部教育の特長のひとつとしても挙げられており、学生に対する教育効果はもとより、連携先が抱える課題の解決という成果を創出することが期待されている。

FAL科目は、「体系性」「協働」「継続的な学び」「教員の主体的な参画」という特長をもつアクティブ・ラーニングである。

「体系性」について、後述のとおり、FAL科目では、入門科目としての「FAL入門」から提案力、修正力を身につける「FAL実践」、そして連携先と学生の協働的实践を目指す「FAL演習Ⅰ～Ⅳ」が開講されており、「1年次はFAL入門とFAL実践でじっくりと準備をしたうえで2年次からFAL演習を履修する」「FAL入門でフィールドにおける活動の基本を再確認しつつ、1年次からFAL演習で実践に取り組む」など、学生の想いや経験に合わせて履修方法を自由を選択することができる。

「協働」について、FAL科目では、連携先との「協働」をもっとも重要なキーワードとして位置付けており、学生は、受動的な態度で連携先と関わるのではなく、主体的(自ら考え、判断し、行動すること)、積極的(自ら進んで行動すること)にプロジェクトに参加し、連携先とともに考え、ともに汗を流しながら目標の達成を目指していく。

「継続的な学び」について、現代社会学部では、在学期間を通じてFAL科目を履修することができる。さらに学生は、4年間を通じておなじプロジェクトに参加して学びを深めることも、4年間さまざまなプロジェクトに参加して視野を広げることも可能である。

「教員の主体的な参画」について、各プロジェクトに1名以上配置される教員は、連携先および学生と積極的にコミュニケーションをとりながら、また自身も主体的に活動に参加することを通じて、プロジェクトの円滑な進行のサポートを行っている。

2) FAL科目の一覧

➤ FAL入門(1年次前期)

学内で実施するFALへの入門科目である。本講義は、フィールドでの活動が未経験の学生に、現代社会を取り巻く現状と課題を知り、フィールドにおける活動に取り組むにあたっての心構えと課題発見、グループワークの具体的な手法を実践的に学ぶ機会を提供することを目的に開講する。またフィールドでの活動をすでに経験している学生にとって、FAL科目に取り組むにあたっては、自ら考え、判断し、行動するという主体性をもって参画することが重要であることを実践的に学ぶ機会となる。

➤ FAL実践(1年次後期)

学内で実施し、FAL演習で必要になるより実践的なスキルの獲得を目指す科目である。講義の一部に連携先の担当者を招いて実施する。具体的には、「連携先からの課題提示→グループでアクションプラン作成・発表→連携先からのコメントを踏まえて修正→最終発表」といった内容に取り組み、提案力と修正力を学ぶ。

➤ FAL演習 I～IV(1～4年次通年)

学内外で実施し、1年次から4年次を対象に通年授業として開講され、企業、自治体、公益法人等(連携先)と協働し、課題解決取り組む科目である。

FAL 科目は、以上に示す体系的なカリキュラムにより、地域社会で活躍し、その牽引役となる人材を育成することを目的としている。



2. 数字でみるFAL演習

表1は、年度別実施プロジェクト数である。教員の活動フィールド、大学の近隣自治体などと、昨年から継続して連携するプロジェクトが多数を占めている。

表1 年度別実施プロジェクト数(件;カッコ内は不開講プロジェクトを含めた数値)

2023	2024
41 ^{※1} (50)	45(51)

※1 統合して実施したプロジェクトを含む

表2は年度別の参加学生数である。

表2 年度別参加学生数(人)

2023	2024
210	373

表3は、学年別の参加学生数である。今年度は1・2回生の参加状況を示す。

表3 学年別参加学生数(人)

	1回生	2回生	3回生	4回生	合計
2023	210	—	—	—	210
2024	193	180	—	—	373

表4は、プロジェクトあたりの平均参加学生数である。参加学生数の増加に伴い上昇しており、しばらくは上昇傾向が続くと予想される。

表4 プロジェクトあたりの平均参加学生数(人)

2023	2024
5.12	7.31

※以上は、キックオフ時点でのデータをもとに算出している。

3. 2024 年度FAL演習活動報告

以下に、プロジェクト名および連携先、参加学生数を示す。

※2024 年 5 月 24 日キックオフ時点

No.	ジャンル	プロジェクト名	連携先	参加人数	担当教員
1	まちづくり	フィールドスタディ(FS)への参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える	飯田市役所	14	後和
2	まちづくり	四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」	四條畷市役所	2	山本藤井
3	まちづくり	産官学協働による地域課題解決	シンク・アンド・アクト	5	竹中
4	まちづくり	「ショッピングリハビリ」にかかわるユーザー・イノベーションの支援	ショッピングリハビリカンパニー株式会社	2	檜田
5	まちづくり	街づくり・公園づくりに参加する	㈱星田逸郎空間都市研究所	6	平山
6	まちづくり	都市型公園の利活用を考える	一般社団法人テラプロジェクト	16	中澤
7	まちづくり	まちの面白さを編集・発信してみよう！	松原市、ほか	8	中澤
8	福祉	「子どもの居場所づくり」と「若者が輝けるまちづくり」に取り組む	交野市社会福祉協議会、ほか	9	上野山
9	福祉	地域の担い手として大学生にできることを考え、実践する	寝屋川市社会福祉協議会、ほか	3	上野山
10	福祉	学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる	有田市社会福祉協議会	20	上野山
11	福祉	アフターコロナ時代の自治会活動継続のために	八幡市役所	10	小池藤井
12	福祉	子どもたちの「自己実現」にともに取り組む	NPO 法人ろーたす	5	好井
13	福祉	障害者ボランティア団体「阪喉会」会員の生き方をネットで発信する	公益財団法人阪喉会		不開講
14	司法	子どもの声を聴く仕事 — 困難な状況にある子どもを支援する現場を知る —	司法面接トレーナーの会	7	田中
15	自然	河川美化と里山保全から考える持続可能な地域づくり	淀川管内河川レンジャーアドバイザー、ほか	8	江口
16	自然	子どもの自然体験教室のサポーター	ポレポレランド、ほか	11	稻生
17	自然	「村・留学」で考える地域社会と生活の未来	PaKT company 合同会社	10	加戸
18	自然	壱岐ボランティアリズムから社会を考える	壱岐島おこし応援隊 チーム防人	12	須藤
19	自然	奈良・御所から人と自然の共生を考える	NPO 法人 NICE	9	落合
20	スポーツ	地域資源を活用したスポーツツーリズムの提案	三田市若者のまちづくり課、ほか	13	谷
21	スポーツ	バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動	枚方市市民活動課、ほか	15	谷堀田
22	スポーツ	球団「兵庫ブレーバース」への支援実践をてこに標準思考から脱皮する「試行錯誤社会学」	兵庫ブレーバース	8	檜田
23	スポーツ	同窓会型スポーツのイベントマネジメント	全国高校野球 OB クラブ連合、ほか	15	谷

24	産業	田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信―「稲武-いなぶ-」で考える持続可能な地域とは	トヨタケ工業株式会社	7	堀田
25	産業	果物好きな若者を増やしたい！	株式会社万果	9	中澤
26	産業	組織の抱える問題・課題を解決に導きながら、働きがいを考えよう	株式会社 ONO plus	2	竹端
27	産業	大阪の”凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい、次世代へ繋げる	大阪の各中小企業・キャリアセンター、ほか	15	山本 竹端
28	産業	工場はまちのエンターテインメントだ！―門真のものづくりの魅力を伝える	門真市産業振興課	8	加戸
29	産業	中小企業が抱える経営課題を GDX で解決する	株式会社フォーバル	6	小池
30	産業	あなたの個性を活かした、地域を巻き込む街づくり。その活動を通じて、違う自分の側面を発見し、自分たちの活動を広げる。	株式会社特殊高所技術	3	浅野
31	多文化	夜間中学・識字教室における社会的マイノリティの学びの支援	守口市立さつき学園 夜間学級、ほか	2	江口
32	多文化	多文化共生・神戸1:移民とともに生きる社会を創造する	神戸定住外国人支援センター(KFC)	不開講	
33	多文化	多文化共生・神戸2:在日コリアンが見つめる日本の姿を知る	一般社団法人神戸コリア教育文化センター	2	落合
34	多文化	多文化共生・神戸3:多文化共生のまちづくりを担う	NPO 法人たかとりコミュニティセンター	不開講	
35	多文化	多文化共生のまち、大阪を見つめる	富田林国際交流協会、ほか	11	落合
36	多文化	中国「残留日本人」とその家族のライフストーリーから考える私たちの社会	中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会	不開講	
37	メディア	三重県いなべ市でのまちかど博物館を活用した地域プロモーション企画	一般社団法人グリーンクリエイティブいなべ、ほか	10	松本
38	メディア	大阪府河内長野市滝畑での地域の人達との映像制作ワークショップ	カフェ放送てれれ、ほか	10	松本
39	メディア	京都の市街地で地域の人達と映像番組制作配信を通じた地域活性化の企画	筒井ラーニング Lab 合同会社	10	松本
40	メディア	まちライブラリー@ちとせでのブックフェスタジャパン 2024 のイベントの企画	まちライブラリー@ちとせ、ほか	10	松本
41	メディア	媒体企業における PR 活動を通じたマーケティングのあり方の検討	毎日放送	3	横山
42	メディア	音声媒体におけるプロモーション・イベントの参加者意識に関する調査	毎日放送	3	横山
43	メディア	地域企業における SDGs 活動への参加	毎日放送	3	横山
44	メディア	地域ネット媒体の役割と若年層に向けたアプローチ	株式会社 morondo (枚方つーしん)	3	横山
45	メディア	SDGs イベントにおけるプロモーションの検討および実施	株式会社シティライフ NEW、株式会社放送映画製作所(MBSグループ)	3	横山

46	イベント	「ふるさと門真まつり」を盛り上げようー楽しいイベントの企画・運営のノウハウを学び、醍醐味を味わう	門真市役所市民文化部地域政策課	15	堀田岩井
47	イベント	総合的観光・食イベント「SAKE Spring」の実施を通じたグローバルな産業振興	のぞみ	8	竹中
48	労働	働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム:ワーカーズコープ1	ワーカーズコープ	7	浅野
49	労働	働く人々の地域コミュニティを体験するプログラム:ワーカーズコープ2	ワーカーズコープ	不開講	
50	災害・防災	東日本大震災・福島原発事故の被災地で考える「地域の未来」	NPO 法人コースター	9	江口
51	文化	人が集い、読書を楽しむ図書館をつくる	交野市立図書館	6	加戸中澤

フィールドスタディへの参加を通じて持続可能な地域づくりについて考える

プロジェクト名

連 携 先 **飯田市大学誘致連携推進室**

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトでは自治体から提供されたフィールドスタディを通して、その地域で展開されている市民と行政の協働によるまちづくりを見学・体験し、その学びの中から持続可能な地域づくりについて考えてもらいます。令和6年度のテーマは『人を幸せにする地域づくり、あなたならどうする？』で、現地学習会は令和6年8月8日～11日の3泊4日で開催されました。7月17日には事前学習会としてオンラインオリエンテーションが開催されました実施されました。現地学習会では他大学の学生とチームを作り、その日に学んだ内容についてグループ討議を行い、飯田市のまちづくりに対する理解を深め、市民の主体性や協働性、行政の在り方などについて学びました。

2. 活動の内容

現地学習会までに行われましたオンラインオリエンテーションに加えて佐藤健飯田市長によるオンデマンド動画が配信され、飯田市に関する事前学習に大変役立つものでした。1日目『飯田の地域づくりの精神に触れてみよう』をテーマに飯田市の若手行政職員や飯田市民が講師となり、飯田市のまちづくりの特徴や仕組み、行政職員の意識について学ぶことができました。1日目の宿泊は農家民泊で、飯田千代地区の農家の暮らしを体験することができました。2日目は「南信州の本物体験観光」や「いいだ人形劇フェスタ」についての講演のあと、市民が中心となり活動しています「りんご並木まちづくりネットワーク会議」に参加することができ、活動の内容を直接聞くことができました。3日目は『飯田国際交流と学びの会』の方々から『KOMINKAN』の誕生についてのお話を聞くことができました。また、市民と直接かかわっています公民館職員の方々から「住民活動の裏側」のお話も聞くことができました。いずれの日も振り返りとしてグループワークが行われ、各グループによる報告がありましたが、最終日には各グループによる成果発表会が行われました。

3. 活動を通じた成果と学び

飯田市で行われる様々なまちづくりの取組みを学び、その基盤となっている「自治」や「協働」について考える機会となっただけでなく、講師となった市民や行政職員と全国から集まった大学生との対話や交流を通じて、学生が自らの考え方や知見を広められる機会となりました。



プロジェクト名 四條畷市田原地域における「地域主体のまちづくり」

連 携 先 四條畷市

1. 活動実施の経緯

四條畷市は、西部と東部で大きく実情が異なっているという特徴があります。西部地域から山を挟んだ東部地域(田原地域)は閑静な住宅地になっており、近年では高齢化が徐々に進行しつつあります。将来的には、(西部地域との環境の差も相まって)その「良さ」も次第に失われていくのではないかという危機感があります。こうした現状をふまえ、田原地域ではこれまでまちづくりを目的としてさまざまな取り組みを行なってきましたが、市外住民や若者の視点が入り入れられていないという課題がありました。こうした現状をふまえ、本プロジェクトでは田原地域のまちづくりへの実際の取り組みや、地域の魅力発信方法の検討などに参加することになりました。

2. 活動の内容

田原地域のイベントに参加し、地域住民とともに地域活性化を促進することを活動の目標として、主に下記の①と②のような2つの地域課題にアプローチしました。

①地域内移動について:従来からのバス運行に加えて、新たに運行する自動運転車(TCC)に試乗しました。

②未利用地の活用について:未利用地を使ったイベントにスタッフとして参加し、子どもやその家族と交流しました。

③カフェミーティングにおいて地域住民の皆さんや田原支所の職員のかたと、上記の2つの課題について話し合いました。

④キッチンカー出店募集のためのチラシ(下の写真参照)を作成しました。

3. 活動を通じた成果と学び

自動運転車に乗って住民の声を聞くことで、田原の地形についての理解が深まりました。イベントには多世代の参加があり、多くの子どもたちに喜んでいただけました。

カフェミーティングでは、住民の生(なま)の声を聞くことができ、それをふまえて学生、若者の視点から田原の問題を考えることができました。地域課題を自分ごととしてとらえて向きあう地域住民がいらっしやることに刺激を受け、「高齢者支援のサービス」「企業のCSR活動への参加」などのFAL以外の活動への参加にもつながりました。

そして行政がどのようなはたらきをするのかを知ることができました。多様なニーズに限られた資源で対応する難しさを感じました。



1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、事前のリサーチとフィールドワークを両立した、地域課題の発見と具体的な解決策の提案を、連携先企業およびフィールドワーク先自治体職員と連携することで、産官学協働による立場の違いを意識した多角的な実践力・課題解決力を身に付けることを目的として始めました。連携先であるシンク・アンド・アクト社は、京都を拠点に、地域や人々の困ったことや素敵なことを集め、これまで繋がっていなかったものをひねって、繋げて、事業を生み出し、社会と人をつなげる仕事をしておられます。ひきこもり支援や学生の就業支援等、多岐に渡る取り組みがある中で、今回は京都府北部地域における観光誘致を促進するプランニングに取り組ませていただくこととなりました。

2. 活動の内容

人口減少が大きな社会課題となっている現状を踏まえて、定住者を増やすことは現実的・効果的な方策であるとは言えません。そうした現状を踏まえて、「地域体験」を通して、地域の魅力を体感し、移住者との直接的な交流でさらなる移住者を増やしていくことと並行して、「関係人口」を増やすべく、各種研修・合宿にて定期的に対象地域に訪れる人口を増やすための方策を考えていくことを、2024年度活動の目標として決めました。

本プロジェクトでは、京都府舞鶴市がフィールドとなりました。はじめに、連携先企業を訪問し、緩やかな雰囲気の中でアイスブレイクを実施、和んだ状況から思いや課題を自由にぶつけ合うことから始めました。その後、参加学生は舞鶴市についてある程度のリサーチを実施し、冬には1泊 2 日のフィールドワークを実施いたしました。そして、机上の計画と現地での体験を組み合わせ、1泊 2 日の観光プランを立案し、連携先企業ならびにフィールドワークにてお世話になった関係者の方々の前でプレゼンテーションを行い、温かくも厳しいフィードバックをいただきました。

3. 活動を通じた成果と学び

本プロジェクトへの参加学生は、京都府・舞鶴市を訪れたことがないどころか、どの辺りにある都市であるのかすらあやしいところから活動がスタートしました。全く縁もゆかりもない都市・地域について考えることから、ともすれば広く浅い知識とアイデアに陥りがちですが、先入観の無さから、純粋な「若者／大学生目線」で物事を、舞鶴市の魅力について考えることができた点は、良い方向に働く結果となりました。また、自分たちが舞鶴市を訪れてる、という段階からシミュレーションを行うことで、交通ルートに係る舞鶴市の抱える問題を指摘した点を、連携先企業に高くご評価いただくことができました。フィールドワークにおいては、自分たち自身が楽しめるコンテンツ・スポットを詰め込んだことから、心の底から楽しみつつ活動に取り組み、そしてその思いをプレゼンテーションに込めることができた点も、「地域の魅力」という切り口に具体性をもたらすことができました。他方、魅力への「思い」が先に立ち、比較を通した一般化・相対化について課題を残す結果となりました。ただ、そのこと自体も、FAL 演習だからこそ得られた気付き・学びであったと言えるでしょう。

プロジェクト名 街づくり・公園づくりに参加する

連 携 先 (株)星田逸郎空間都市研究所

1. 活動実施の経緯

連携先の星田逸郎空間都市研究所は、さまざまなアーバンデザインと建築設計において、先駆的かつ公共的な空間形成に関し、多くの成果をあげてきたことで知られています。同研究所が寝屋川市内の国松地域にて公園づくりを中心とした一戸建て住宅地のプランニングを実施するにあたり、FAL 演習の受講生に「街づくり・公園づくりに参加する」機会を提供して下さいました。このプロジェクトでの受講生は、実際に“目の前”で進む街づくり・公園づくりの現場に触れるなかで、多くの関係者がどういう役割をはたし、空間のプランニングがどう進展するのかを学び、また、意見を述べ、プレゼンテーションを行う機会を与えられました。

2. 活動の内容

受講生は、おもに以下の活動に参加しました。

- ① ディベロッパー、ハウスメーカー、寝屋川市、近隣住民、連携先などの専門家・プランナーが集まり、どうい公園をつくるのか関し、意見を交換し、協働するワークショップに参加し、誰が、どういう意見を持ち、その調整からどうい空間デザインが生まれるのかを体験しました。
 - ② 公園デザインを学ぶために、「ダムパークいばきた」等の公園のフィールドワークを行いました。
 - ③ ハウスメーカーを対象とする一戸建て住宅地プランニングの研修会に参加しました。
 - ④ 街づくりの方法の一端を学ぶために、梅田地区エリアマネジメント実践連絡会主催「ウォーカブル梅田」に参加し、街の徒歩観察と写真撮影、その成果のまとめ方などを学びました。
-

3. 活動を通じた成果と学び

このプロジェクトの中心であった上記①では、公園のあり方について、さまざまな立場から異なる見方が示され、そこから空間がどのようにデザインされるのかを学びました。街の強みと弱み、新公園への期待と懸念、“動と静”の両立の必要、安全・安心対策、施設の種類などに関する意見が活発に交換・調整される“現場”の体験から、街づくり・公園づくりについての理解深めました。

さらに、②～④の活動では、街づくりと空間設計・デザインの技法を、現地視察、研修会参加、街歩きなど、さまざまな角度から学びました。



プロジェクト名 都市型公園の利活用を考える

連 携 先 一般社団法人テラプロジェクト

1. 活動実施の経緯

大阪は、東京23区より緑被率が低く、みどりは少ない状態です。一般社団法人テラプロジェクトは、都市部に緑を取り戻すため、さまざまな活動に取り組んでいます。FAL演習では、大阪市北区にある扇町公園を舞台に、学生たちはみどり豊かな社会の実現に向けて、どのような課題が存在するのか、課題解決にはどういったイベントを開催すべきなのかについて考えました。

2. 活動の内容

【前半】扇町公園周辺のフィールドワーク

扇町公園と天神橋筋商店街の現状と課題を知るため、7月12日にフィールドワークを実施しました。学生たちは、扇町公園やその周辺を歩き、情報を収集しました。その後、4つのグループに分かれ、それぞれのグループ、①扇町公園の現状と課題、②扇町公園でのイベント、③天神橋筋商店街の現状と課題、④天神橋筋商店街でのイベントについて考え、発表資料を作成しました。

7月26日に、テラプロジェクトのオフィスにて、これまでの調査をまとめた報告会を実施しました。たくさんのコメントをいただき、学生たちにとって大変貴重な機会になりました。

【後半】扇町公園でのイベントを考える

12月13日に、扇町公園パークセンターで「都市型公園の利活用を考える」提案発表会を実施しました。学生たちは、発表会にむけて扇町公園やその周辺を盛り上げるイベントについて考えました。発表会では、「扇ネーション」や「箱根よりも熱い扇町駅伝」「フリマで次世代へ～みどりでつなぐ」など、さまざまなアイデアが出され、大変盛り上がりました。

【ボランティア】

テラプロジェクトは、みどりのボランティアキッズやレモンの回廊づくりなどさまざまなイベントを開催しています。学生たちは、イベント開催時に運営のお手伝いをさせていただきました。実際にイベントを運営する際に気を付けるべき点や、イベントの盛り上げ方などたくさんのことを実践的に学びました。また、イベント企画の大変さについても自分たちの身をもって知ることができました。

3. 活動を通じた成果と学び

活動を通して、現在、扇町公園やその周辺市域が抱えている課題について、自分の身をもって知ることができました。これらの課題を解決するために、グループ内で議論のために多くの時間を費やし、課題の解決方法や企画の提案力、人へ伝える資料の作成スキルなどさまざまな力を身に付けることができました。実際に、ボランティアなどに参加することで、「みどり豊かな社会の実現」に向けて取り組むべき課題がより明確になりました。次年度は、学生たちが考えてくれたイベントの実現に向けて取り組んでいきます！！



プロジェクト名 まちの面白さを編集・発信してみよう！

連 携 先 松原市役所・松原市観光協会

1. 活動実施の経緯

松原市観光協会は松原市の賑わいと交流の創出を目的に、現在、観光に対する広告や宣伝、イベントの企画や実施などさまざまな情報を発信しています。FAL演習では、「見たもの、感じたものを編集し、文章でターゲットに届ける」を目標に、学生たちは松原市内の魅力を発掘し、それを自分たちの文章でまとめ、発信するといった活動に取り組みました。

2. 活動の内容

【前半】Web やSNS情報から松原市の魅力を調査し、発信する

学生自らが松原市の魅力を発掘し、自分たちの言葉で文章を作成することが、前半の活動内容でした。学生たちは、松原市内で気になるお店を探し、自分たちで取材の日時を交渉しました。取材の日時が決まったあとは、学生たちはどういった記事を作成したいのか、お店の方にどういった内容を聞きたいのか、質問票の作成に取り組みました。

取材当日は、お店の魅力やこだわり、お店の商品などについて聞き取り調査を実施しました。「お店の魅力を伝えるにはどうしたらよいのか」「読み手はどういった情報がほしいのか」など、試行錯誤しながらブログ記事を執筆しました。松原市観光協会の「みなみてかわち」に、学生たちが作成した記事が掲載されました。

【後半】まつばらマルシェのブースのお手伝い

11月9～10日と2日間にかけて開催されたまつばらマルシェにおいて、学生たちは松原市観光協会ブースの運営のお手伝いをさせていただきました。松原市観光協会は、松原市の賑わいと交流の創出を目的に設立され、SNS を通して松原市の魅力を発信しています。まつばらマルシェでは、松原市観光協会の SNS をフォローすると、松原市のマスコットキャラクター「マッキー」のグッズが当たるイベントを開催しており、学生たちは、イベントに参加していただけるよう、多くの人に声かけを実施しました。また、休憩時間には、学生たちは来客者としてマルシェ内を散策しました。気になった食べ物や催し物について、それぞれ記事を作成し、まとめたものが「みなみてかわち」に掲載されました。

3. 活動を通じた成果と学び

前半の活動では、取材先が飲食店に偏ってしまったという反省点があるのですが、学生たちは取材時の事前準備の重要性や人に伝える文章の難しさについて学ぶことができました。また、まつばらマルシェの活動を通して、地域活性に向けて、自治体がどのような取り組みをおこなっているのか、実践的に学ぶことができました。



もふもふなかき氷が食べられる「和」



古民家を活用したドッグカフェとショップ!「ten_cafe」



大阪・松原市にある!食品ロス削減に取り組むカフェ「M J CAFE」



(<https://matsubara-kanko.net/>)より引用。

プロジェクト名 「子どもの居場所づくり」と「若者が輝けるまちづくり」に取り組む

連 携 先 交野市福祉総務課・社会福祉法人交野市社会福祉協議会

1. 活動実施の経緯

だれもが支えあい、役割をもって活躍できる地域共生社会の実現をめざし、①夏休み期間中の子どもの居場所づくり、②若者が輝ける地域について対話する場づくりに取り組みました。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
<u>ゆうゆうサマースクール</u> 子どもたちが福祉について学ぶイベントの運営サポート	交野市ゆうゆうセンター
<u>子どもの居場所づくり</u> 校区福祉委員会を中心に開催される夏休みの子どもの居場所づくり活動で、勉強や工作、遊びのサポート	井手之内会館、藤が尾会館、幾野会館、倉治公民館、妙見東自治センター
<u>ICT 講座</u> 登録ボランティアの方を対象に開講された ICT 講座に運営サポートとして参加	交野市ボランティアセンター
<u>「地域活動に対する若者の意識調査」の実施・集計・分析</u> 地域福祉計画、地域福祉活動計画に若者の声を反映させることを目的に学内で調査を実施	摂南大学

3. 活動を通じた成果と学び(参加学生の感想)

- 幅広い世代の方たちとの関わりを通じて、コミュニケーションの方法を学ぶことができた。
 - 地域ボランティアの存在がだれかの居場所になっていると実感した。
 - 地域と若者を繋げるためにどうすればよいのかを若者の目線で考えることができ、自分自身の住んでいる地域のことも考えようと思える活動になった。
 - 地域のために自分はなにができるのかを考えるきっかけになった。
 - 子どもたちや高齢者の方々と関わり、相手の気持ちに寄り添うことが大切だと学んだ。
 - 世代や立場を超えたつながりを大切にする活動に積極的に参加していきたい。
 - 人と人の関わりが大切であることを学んだ。
-



プロジェクト名 地域の担い手として大学生にできることを考え、実践する

連 携 先 社会福祉法人八幡市社会福祉協議会、社会福祉法人みつわ会、浄土宗 超泉寺、
社会福祉法人和歌山市社会福祉協議会、ほか

1. 活動実施の経緯

だれもが支えあい、役割をもって活躍できる地域共生社会の実現を目指し、大学生にできることを考え、寝屋川市(大阪府)、和歌山市、紀美野町(和歌山県)、八幡市(京都府)などでさまざまな活動に取り組んでいます。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所	おもな連携主体
道掃除を通じた地域住民との交流	和歌山県紀美野町	地域住民
コミュニティスペースの活用	大阪府寝屋川市	社会福祉法人みつわ会
認知症についての情報発信	京都府八幡市	八幡市、八幡市社会福祉協議会
子どもの居場所づくり	和歌山県和歌山市	高松地区自治会
ぼら子どもまつりの企画・運営	大阪府寝屋川市	寝屋川市社会福祉協議会
人生日記を通じた認知症啓発	大阪府寝屋川市	寝屋川市社会福祉協議会
ネットリテラシー講座	大阪府寝屋川市	社会福祉法人みつわ会
マルシェイベントでの防災講座	大阪府寝屋川市	浄土宗超泉寺
今福おこしでのブース企画・運営	和歌山県和歌山市	今福地区社会福祉協議会

3. 活動を通じた成果と学び(参加学生の感想)

さまざまな連携先とともに活動するなかで、まずは「連携先が大学生になにを求めているか」をしっかり理解し、実践することの大切さを学びました。このような実践を積み上げていくことで、連携先との信頼関係が徐々に醸成され、「連携先から任されること」の範囲も広がっていきます。そして「連携先に任されること」に取り組むうえでは、大学生として、自分の「得意」を生かして連携先のためになにができるかを考え、実践することも重要です。もちろん大学生は未熟な部分も多々ありますが、大学生だからこそ、「私」だからこそできることもたくさんあるはずです。そのような想いを忘れずに、これからもそれぞれの地域、連携先に寄り添っていきたいと思います。



プロジェクト名 学校にいけない・いかない子たちの居場所をつくる

連 携 先 **社会福祉法人有田市社会福祉協議会**

1. 活動実施の経緯

有田市社会福祉協議会が定期的で開催する「学校にいけない・いかない子をもつ親同士がつながる場」から派生したプロジェクトです。2022年度、摂南大学PBLプロジェクトの一環として開始、23年度からはFAL演習で活動を引き継ぎ、現代社会学部の学生を中心に、他大学の学生や市社協、地域のさまざまな個人、団体と連携しながら子どものあらたな居場所づくりに取り組んでいます。

2. 活動の内容

バーチャル、リアルを併用した居場所づくりに取り組んでいます。

○バーチャルの居場所(毎週金曜日(第4金曜日を除く))

オンライン上のバーチャル空間(「oVice」)を活用し、参加者と大学生が交流しています。大学生スタッフが毎回の「トークテーマ」を設定していますが、会話のなかで趣味やゲームの話、日々の生活やそれぞれの地元の紹介など、話題がめまぐるしく変化することもバーチャルの居場所の醍醐味です。

○リアルの居場所(第2土曜日および第4金曜日)

有田市内の「ヒミツキチ」を活用して、対面での交流を楽しんでいます。金曜は午後の時間帯に、芋掘りや仮装パーティーなど季節ごとのイベントやスタッフと参加者で企画したゲームなどを楽しんでいます。土曜は午前中から参加者とスタッフが一緒になって料理をつくり、食事を楽します。その拠点は有田市内を転々としています。食事のあとはゲームをしたり散策をしたり、楽しい時間を過ごしています。

○教育支援センター分室での交流(第3金曜日)

有田市立有和中学校内に設置されている教育支援センター分室「ふらっと」にて、生徒との交流を楽しんでいます。「ふらっと」での交流をきっかけに「バーチャルの居場所」「リアルの居場所」に参加してくれるようになった生徒もたくさんいます。

3. 活動を通じた成果と学び

居場所の参加者(小学生から高校生)と年齢の近い大学生スタッフが企画、運営することで、参加者にとっても親しみやすい、訪れやすい場をつくることができました。また、年齢が近いことで、参加者が近い将来を想像するきっかけになるようで、将来の夢を話してくれたり、調理や片付けなどを率先して取り組んでくれたり、活動のたびにすこし「大人」になった参加者の姿をみることができます。

大学生にとっても、子どもたちの性格や個性を踏まえたコミュニケーションの方法や、参加者が楽しんでくれる活動を企画、運営する方法、スタッフ間の円滑な連携方法を学ぶよい機会となりました。



連 携 先 **八幡市役所**

1. 活動実施の経緯

高齢化の進む住宅団地では、自治会の担い手不足により活動を継続していくことが難しくなっています。交流会や年中行事などの中断を余儀なくされたコロナ禍をへて、かつての活動を再開することに困難を抱えている事例も見られます。このような課題を抱えている地域の一つが京都府八幡市男山団地の自治会でした。そこで、八幡市役所と連携し、男山団地自治会の皆さんと一緒に、夏祭りや秋祭りのイベントを運営する活動に取り組みました。

2. 活動の内容

○男山団地 B 地区夏祭り

5年ぶりの開催となる男山団地 B 地区の夏祭り開催に向けて、祭りの企画段階から学生が参加し事前の打ち合わせや準備作業を重ねました。8月にあった祭り当日は早朝の準備、夕方からの運営、翌日の片付けまで、B 地区自治会の皆さんに協力しました。学生企画として、子ども向けにうちわ作りのワークショップを行いました。たくさん子どもたちに参加してもらい、50 枚用意していたうちわは、すべてなくなりました。祭り全体としても多くの来場者があり、大変盛況でした。

○男山団地 A 地区秋祭り

10月には男山団地 A 地区の秋祭りに参加しました。7 月からはじまった企画の打ち合わせから学生が参加し、夏をとおして事前に当日の出し物の準備を行いました。当日は準備、運営、片付けまで、A 地区自治会の皆さんに協力しました。おもに担当した子ども向けのクラフトコーナーでは、竹製のカスタネット、コマ、木笛、紙飛行機、缶バッチなどを作る体験をしてもらいました。たくさん子どもたちに参加してもらい、楽しんでもらえました。地域のお祭りをにぎやかなものにすることができ、学生たちにとっても嬉しい体験でした。A 地区と B 地区は、同じ団地内で一見似た地域ですが、お祭りの活動をともにし、住民さんたちと関わることで、地域ごとの違いも学ぶことができました。

3. 活動を通じた成果と学び

自治会の役員さんたちと一緒に活動するなかで、高齢者中心の限られた人数で自治会活動を行う大変さを感じ、自分たちにも力になれることがあることを理解することができました。同時に、地域でイベントを行うことの楽しさややりがいを感じることもできました。さらに、団地内で近年増加している若い世代の外国籍住民と高齢者が多い日本人住民の交流を増やし、一緒に自治会活動に取り組んでいくことが、今後重要になるのではないかとこの気づきを得ました。



プロジェクト名 子供たちの「自己実現」に取り組む

連 携 先 NPO 法人「ろーたす」

1. 活動実施の経緯

ろーたすでは学校に行けない子供たちの支援を行っています。そこで子供たちの自己実現には何が必要なのか、大学生との活動を経て考えてみてはどうか、という考えから、今年度から FAL 演習の実習先として加わりました。スタッフの方、ボランティアの方、摂南大学生が子供たちと共に活動していく中で子供たちの自己実現を目指していきました。

2. 活動の内容

ろーたすは、フリースクールをはじめとした訪問支援や個別指導塾といった学校に行けない子供達への学習支援を行っています。フリースクールの主な目的は①学習機会の確保②学校、家庭以外の自己実現の場の提供③次の進路(進学、就職など)への準備の 3 つです。

また、学校に行けない子供への支援だけでなく、その子供を持つ親御さんの居場所を提供する「スナックろーたす」も実施しています。

その中で、私達は子供達との交流を積極的に行いました。子供達との交流で、信頼関係を構築し現在の教育現場における課題を探していきました。

3. 活動を通じた成果と学び

今回の活動を通しての学びは子供が不登校になってしまう原因が様々であり複雑なため先生・学校側の対応が難しく改善していかなければならない状況にあるということです。この学びに気づけたのはろーたすの子供たちとの交流・代表が子供たちの事情を話してもらった機会を設けてもらったことも大きいです。成果としては、自分たちが思っていた以上に施設の子供たちとコミュニケーションを取れていたということです。成果として実感できた理由は、自分たちが通う金曜日に来ている子供たちに自分たちを覚えてもらい仲良くなりお互いに名前やあだ名をしっかりと覚えることを意識し取り組んでいると演習に来るのが最後だと伝えた時に想像していたより子供たちが悲しんでくれていたからです。以上が約 1 年間演習に感じてきた成果と学びです。



プロジェクト名 子供の声を聴く仕事

連 携 先 司法面接トレーナーの会

1. 活動実施の経緯

「こども基本法」の制定や「こども家庭庁」の設置から、「こどもの権利」についての関心が高まっており、さまざまな場面で子どもの意見表明権の重要性が強調されています。しかし、特に虐待児童や犯罪に巻き込まれてしまった子ども、両親の離婚や非行問題に関係している子どもから話を聞くことが大変難しく、特別な聞き取り方が必要とされています。そのため、そのような子どもたちに対応する警察や児童相談所、家庭裁判所では聞き取り方の研修を行なっています。私たちは、児童虐待や犯罪被害、両親の離婚や非行問題に関わる支援の実態を学び、学生の立場から聞き取りの研修のための動画を作成・提供しました。

2. 活動の内容

【前期】 子どもの声を聴くための取り組み、仕事の実態を知るために8月に大阪家庭裁判所を訪問し、家庭裁判所調査官の方から子どもとの面接について話を聞きました。また、9月には広島県での日本犯罪心理学会に参加し、様々なシンポジウムや研究発表に触れました。そして、司法面接トレーナーの会や共同養育支援センターで活動されている方とオンライン勉強会を行いました。

【後期】 前期で得た知識経験を活かし、研修で使うための動画撮影を行っていきました。1年生は①ストーカーによる盗撮を想定した場面、②ダンスの練習場面のテーマで撮影し、2年生は③友人との会話場面と④DV を目撃した子どもの視点というテーマで計4本の動画を撮影し、研修で使用していただけるようトレーナーの会に提供しました。

3. 活動を通じた成果と学び

活動を通して家庭裁判所へ訪問した際に子どもの気持ちを第一に考え慎重に調査を進めていることと犯罪心理学会へ参加し、シンポジウムやポスター発表で司法面接の重要性を感じたこと、オンライン勉強会では被害を受けた子どもたちに対し、細かい配慮が行き届いたことを知りました。これら様々な活動を通して、子どもの声を聴くための取り組みの重要性や現場の実態を知ることが出来ました。また研修に使用する動画作成では犯罪に関する動画と日常を切り取った動画を1回生と2回生に分かれ撮影しました。作成を通して演出の工夫やリアリティを出すために画角を考える力を身につけることが出来ました。学年関係なく一体となって活動に対し積極的に取り組み、アドバイスを出し合いながら協力しやり遂げた1年間でした。

家庭裁判所訪問



中間報告会



プロジェクト名 河川美化と里山保全から考える持続可能な地域づくり

連 携 先 淀川管内河川レンジャーアドバイザー(環境再生医(上級))、
ひらかた独歩ふぁーむ

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトでは、Panasonic ECO RELAY JAPAN で長年地域社会と共に環境保全活動に取り組まれ、淀川管内河川レンジャーアドバイザーとしても活動されている山口進氏のコーディネートによって、①守口市庭窪地区における淀川河川敷清掃・環境保全活動、②枚方市穂谷地区における里山保全活動の 2 地域で定期的に活動を行っており、2 年目の活動となった。なお、淀川の環境整備に関しては本学のエコシビル部が既に長年連携を行なって活動に参加している。

2. 活動の内容

①守口市庭窪地区における淀川河川敷清掃・環境保全活動(第 2 日曜日)

淀川の生物多様性を保つ上で重要なワンドがある庭窪地区にて、天然記念物で淀川のシンボルフィッシュであるイタセンパラの保存活動を行う市民団体や他大学の学生グループ等と共に、河川敷清掃や外来植物除去などの活動に参加した。

②枚方市穂谷地区における里山保全活動(第 3 土曜日)

2015 年から「ひらかた独歩ふぁーむ」を設立して就農し、里山保全を意識した有機農業を行う大島哲平氏の活動や山口氏らが進める里山再生活動に協力しながら、他大学の学生グループやパナソニック OB 等の市民らと共に、竹や雑草の伐採、水路確保作業、腐葉土の回収など、山(自然)に暮らす動植物と人間の共生を実現するための里山保全活動を行った。

③学内での啓発活動

活動の中で学んだ内容を広く摂南大学生に周知し意識啓発を図るため、3 号館内のごみ箱の所にごみ分別を訴える啓発ポスターを掲示した。

3. 活動を通じた成果と学び

今回の活動を通して、インフラが整備された都市で快適な暮らしを送ることができる背景に、河川や里山などの自然環境を保護する行政や市民の絶え間ない取り組みがあることを理解することができた。また、今年度は現場活動だけでなく学内での学習会も合わせて実施したことで、農業従事者の減少による里山の荒廃、マイクロプラスチックによる動物や人間への被害、河川の生物多様性保護の難しさ、SDGsの達成が課題となる世界の状況等、大きな社会課題と現場での具体的な活動が結びついていることについて理解を深めることができた。また、学内での啓発活動に取り組むことができ、自分たちの見聞きした環境問題を広く社会に発信することの大切さを学ぶことができた。



1. 活動実施の経緯

子どもの自然体験の不足が叫ばれる中、あるべき「環境教育」の在り方の探求の一つとして子ども自然体験教室が各地で実施されている。

子どもエコクラブなども活発になされているが、学校単位が多い。しかし、本プロジェクトは、学校単位でない活動に参加し、準備、事後活動を含めて子どもの自然体験教室とそのサポート体制の在り方を学ぶ。

2. 活動の内容

本年度は、京田辺市のポレポレランドにおける活動の当日の活動に参加するにとどまったが、ほぼ毎回の活動に参加できた。

ポレポレランドは、もともと畑だった場所で農作業を含め、自然科学的な実験や自然にかかわる遊びなどを子どもとともに体験した。また、ポレポレランドを出て、沢登り体験なども子供と一緒に行った。

3. 活動を通じた成果と学び

登校拒否の子どもなども含めて、さまざまな子どもがさまざまな自然体験をしている姿を見ることができた。その中で、子どもの多様性、自然の多様性を学ぶことができた。

ただ、子どもがいないときの準備のしかた、事後の反省活動などへの参加が少なかったこと、ほかの活動との比較ができなかったことなどが反省点である。

プロジェクト名 「村・留学」で考える地域社会と生活の未来

連 携 先 PaKT company 合同会社

1. 活動実施の経緯

PaKT が運営する「村・留学」は、学生たちが日本の農村地域に滞在し、現地の生活を体感し、持続可能性について学ぶプログラムです。FAL 演習では昨年はこちらに参加しています。

2. 活動の内容

事前学習として、『民俗学 ヴァナキュラー編: 人と出会い、問いを立てる』(加藤幸治著、武蔵野美術大学出版局、2021年)の一部を輪読しました。その後、五ヶ瀬・久多・奄美に分かれ、8泊9日の「村・留学」のプログラムに参加しました。今年は「ヴァナキュラー」をキーワードに学びました。

【五ヶ瀬】:地域の人々にお話をお伺いして暮らしの在り方や価値を見つめ直すだけでなく、カヌー体験やピザ作りをしたり満天の星空を眺めたり…普段の生活の中では体験出来ないこと・ものに触れました。

【久多】:前半では松上げ、花笠といった地域の伝統的な祭りに参加。後半は、住民の方とお話やともに作業をする、ともにご飯を食べるなど久多の人とのかかわりを深めました。

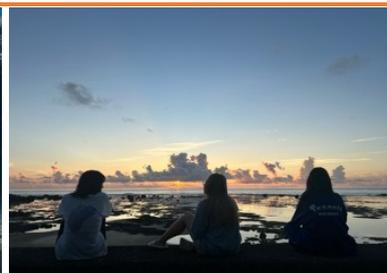
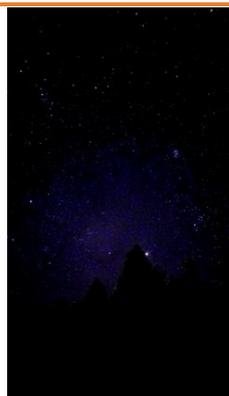
【奄美】:9 日間のうち、台風の日以外は毎日海に入っていました。他にも畑の収穫のお手伝いや、公民館での食堂のお手伝いなど、あくまで皆さんの日常生活にお邪魔させていただきました。

3. 活動を通じた成果と学び

【五ヶ瀬】:普段の生活とは異なる環境で 9 日間を過ごただけでなく、地域の方々のあたたかさに触れることで限られた人としか関わらなくなってきている社会の中で、人と人との関わり大切さを改めて感じました。また、自分の能力や知識を五ヶ瀬に還元している方のお話を聞くことでサステナビリティも体感することが出来ました。

【久多】:「生活のすべてを自分事として捉え、伝統や習慣に沿って生活していく」。人とのかかわりを深めていく中で、久多に対して抱いている思いについて深くまで聞くことができました。それぞれが久多の未来について考えを持っており、来年の目標は…と語る人もいました。この成果は、主催者の方が事前に私たちが来ることを知らせてくれたこと、そして私たちが築き上げる信頼によるものだと感じました。

【奄美】:おもてなしではなく日常におじゃまさせてもらったからこそ、都会の日常と離島の日常の違いが分かりました。世界自然遺産にも登録されている奄美大島の綺麗な海は、毎日ゴミ拾いがされています。近隣の草は草刈りがされています。田舎の自然は美しいだなんて言うけど、それはどれも人の手があってこそ保たれているものです。都会ではお金を払ってサービスを得るけど自分の手を動かすということを学びました。



プロジェクト名 壱岐ボランティアリズムから社会を考える

連 携 先 壱岐島おこし応援隊チーム防人(ボランティア団体)

1. 活動実施の経緯

壱岐市委託事業である海岸漂着ゴミ発生抑制対策「ボランティアリズム in 壱岐」は、市内の中・高生約150人に加え、五島、対馬、長崎など島外ボランティア団体も参加するイベントです。10年以上続いており、2024年で第14回となりました。摂南大学としては、23年度から参加しています。外洋に浮かぶ壱岐島には、海流の影響もあって国内外から大量のゴミが漂着します。そのゴミを拾いながら、大半を占めるプラスチックゴミについて知り、合わせて離島の観光も楽しみながら地球環境を考える取り組みです。

2. 主な活動の内容

【6月28日】福岡市東区西戸崎の海岸で、海洋ゴミの状況を調査しました。夜は、博多で一泊。

【6月29日】博多港よりフェリーで壱岐島へ。雨のなか、バスで天ヶ原海岸まで移動し、参加者全員で清掃ボランティアを行いました。ペットボトルや割れたプラスチックなどの小さなものから、漂着した巨大な浮きや漁網類まで、23立方メートルもの大量のゴミを回収しました。

夜は、参加者との交流会。地元の美味しい食材をいただきながら、1年ぶりに再会した他大学の学生らと旧交を温めたり、社会人の方のお話を伺ったりと、有意義な時間を過ごしました。

【6月30日】一支国博物館にてシンポジウムに参加しました。九州大学・清野聡子先生による基調講演をはじめ、各団体がそれぞれの活動を発表しました。その後は、バスで島内観光へ。左京鼻、鬼の足跡、猿岩、小島神社など、ダイナミックな自然が魅力の壱岐の名所を巡りました。

【9月15日】海洋ゴミとの比較のために、大阪海さくら主催の淀川ゴミ拾いに参加しました。壱岐のような大型漁具等のゴミが無い一方、ペットボトルや弁当ガラのような生活ゴミが目につきました。

3. 活動を通じた成果と学び

コロナ世代の学生たちにとって、関西を飛び出し、2泊3日を先輩・後輩を含むチームメンバーと過ごすことが、まずは大きな学びとなります。壱岐離島では海洋ゴミ拾いのボランティアを行うことで、漂着するゴミの種類やその回収の困難さなどを、身をもって体験します。海流によって流れついた外国のペットボトルは、日本のゴミもまた外国へと流れていることを物語っています。海洋ゴミの研究を専門とする他大学の先生のお話を聴くのも、貴重な機会となります。そして最も重要なのは、九州大学留学生、九州産業大学・宗像ゼミ、佐賀大学や長崎大学のボランティアサークル、社会人ボランティア団体らとの交流でしょう。参加学生たちは、しっかりとコミュニケーション能力を発揮し、授業では得られぬ知識を得ていました。



プロジェクト名 奈良・御所から人と自然の共生を考える

連 携 先 NPO 法人 NICE(日本国際ワークキャンプセンター)

1. 活動実施の経緯

奈良県御所市の「杉浦農園」では、2003 年から無農薬栽培による環境保全型農業に取り組んでいます。高齢過疎化が進む御所において、農業の継承者の不足は大きな問題です。杉浦農園には国内外から年間500人の若者がワークキャンプに参加し、有機農業のサポート(夏野菜の収穫、畑や田んぼの整備など)を通して、持続可能な農業と食の安全、地域活性化について考えます。2017年から神戸大学の学生の国内研修先として学生派遣が行われてきました。2024年度は摂南大学の学生9名と神戸大学の学生1名によるワークキャンプとなりました。

2. 活動の内容

2024年度本プロジェクトのFALに参加した学生は8月20日から27日に奈良県御所市にある杉浦農園にて泊まり込みで農業を体験しました。主に農作業として取り組んだのは堆肥づくりと草刈りです。堆肥づくりでは草と酒糟と米糠を交互に重ねて上から水をかけるという作業を繰り返し、草刈りでは夏の草の繁茂と戦いました。農業は体力的な厳しさもさることながら、季節や天候に左右されるため、収穫が行えない時期も多く、農業の過酷さを実感しました。コンビニのない暮らし、地元の人に分けてもらったトマトのみずみずしさ等、これまで体験したことのない暮らしの中で、農業の今後について考え話し合いました。ワークキャンプの様子は摂南大学のHPでも紹介されました。

<https://www.setsunan.ac.jp/news/detail/6982>

3. 活動を通じた成果と学び

実際に農業に携わってみて農業のやりがいには①自然豊かで景色がいい②現地住民の方とのつながりを楽しめる③野菜など自然の実りを体感できる。等の良い点も実感できました。

しかし統計を見ると農業への若者の参入は減り、未来の農業の先行きは不安です。どうしたら農業は盛り上がるのか考えた結果「若者に農業を体験してもらい、そのやりがいを知ってもらう」「技術を向上させることで農業負担を減らすことで農業に参入しやすい社会を作る」などの改善案を考え、成果報告会で発表しました。



農業のやりがい

- ・自然豊かで景色がいい
- ・現地住民の方とのつながりを楽しめる
- ・野菜などが実る etc...



1. 活動実施の経緯

兵庫県三田市では、2017年4月よりウォーキングコースを活用した市民の健康づくりと、三田の特徴を活かしたスポーツイベントとして開催しているノルディック・ウォーキングのイベントを通じて、三田市の魅力発信に取り組んでいます。市民ならびに市外から人を呼び込むノルディック・ウォーキングの普及推進が課題となっており、三田市にある里山などの豊かな自然や歴史・文化といった地域資源を活用したスポーツツーリズムとして発展させたいという思いを形にしたのが当プロジェクトです。昨年度から摂大生が活動に参画し、自治体と連携しながら取り組んでいます。

2. 活動の内容

2024年度は下記の活動に取り組みました。

○さんだファミリースポーツカーニバル&市民チャレンジデーへの参加(6月16日@駒ヶ谷運動公園)

ノルディック・ウォーキングの体験と参加者へのアンケートを行い、健康や体力づくりに適した種目であるとの意見が多く見られた。また、体育館やグラウンドで実施されたニュースポーツやパラスポーツ体験の補助スタッフとしても活動した。

○文化スポーツ課によるワークショップ体験とフィールドワークの実施(7月~9月)

三田市とノルディック・ウォーキングへの理解を深めるため、文化スポーツ課の講義とワークショップに参加した。学んだことを踏まえ、8~9月にかけてグループごとにフィールドワークを三田市内各所で実施した。ウォーキングコースを巡りながら、ノルディック・ウォーキングのポールを実際に用いた動画撮影とインスタグラムへの投稿に取り組んだ。

○さんだノルディック・ウォーキングフェスタへの参加(10月6日@兵庫県立有馬富士公園)

参加者受付やポールの貸し出し等の補助を行い、参加者と一緒にファミリーコース(2.3km)を歩きながら、歴ネットさんだによるガイドを通して有馬富士周辺の歴史について学んだ。

○ノルディック・ウォーキングのポール設置の依頼(12月)

文化スポーツ課の協力のもと、三田市内10か所のウォーキングコース内にある公共施設にポール設置を依頼した。また、「令和6年度三田市学生まちづくり活動費補助金制度」を活用して、承認の得られた施設に設置するステッカーとチラシの作成に取り組んだ。

3. 活動を通じた成果と学び

- 学校内外の活動を通して積極的に活動に参加する、イベントのスタッフの時は、スタッフとして何が出来るのかを考え活動に取り組んだ。学内の活動では自分の役割を全うして自分にできる最大限の力を発揮して取り組んだ。
 - ノルディック・ウォーキングをどのようにすれば拡散できるかを考えた
 - 連携先との連絡の取り合い、メンバーをまとめる、資料作りなど、リーダーとして多様な意見や視点を踏まえながらプロジェクトが円滑に進むよう取り組むことができた。
 - 先生などをあまり頼ることなく、自分たちだけで、率先して動く力が身についた。
-

- 実際にプロジェクトに携わることで見えてくる課題や問題点の解決策を考え実行する力が身についた。
- 普及活動のシミュレーションや再現性の計算、SNS を活用した拡散方法の考案、住民の目に留まりやすい工夫をすることができた。
- チームワーク力が身についた。他には、新たな地へ行き、様々な人や自然に触れ合い自分になかったアイデアがたくさん広がった。
- この FAL 演習を通して、受動的に行動するのではなく、自分たちで先を見通してスケジュールを組み外に働きかける力が身に付いたと感じる。また、報告会の際には私たちの活動を知らない人にどういったら分かりやすく伝わるのかという部分を工夫した。今までは学内の活動や先生が間を取り持った活動しかした事がなかったが、直接市の方々とお話しする機会があることで、立ち回り方を学ぶことができた。
- 仲間と協働して、プロジェクトがより良くなる方法を考え出すことや、連携先と協力して課題解決に取り組むことができた。




**摂南大学 現代社会学部 ×
さんだノルディック・ウォーキング**

私たちは、摂南大学 現代社会学部の学生です！
 三田市と協働でノルディック・ウォーキングの普及、
 地域資源を活用したスポーツによるまちづくりを
 授業のプログラム(FAL演習)として取り組んでいます！

ノルディック・ウォーキングとは？
 専用のポールを使って歩く、フィンランド発祥の健康運動
 通常のウォーキングに比べ、高い運動効果が期待できる



FAL(フィールドアクティブラーニング)とは
 自治体や企業、NPOなどの組織と、共有された
 目標の達成に向けて協働する実践志向のプログラ
 ムで、摂南大学現代社会学部の授業カリキュラムの
 特色のひとつ、連携先との協働的実践を通じて、課
 題を発見し、他者と協働しながら解決に導く力を身
 につけることを目指しています。


 Instagramで私たちの活動を発信中！
 フォローをお願いします！

プロジェクト名 **バレーボールを通じた地域の賑わい創出とプロモーション活動**

連 携 先 **枚方市市民活動課、枚方校区コミュニティ協議会大阪ブルテオン応援団**

1. 活動実施の経緯

枚方校区コミュニティ協議会内の賑わい特別委員会として発足した「大阪ブルテオン応援団」では、枚方市を拠点に活動する SV リーグ所属の大阪ブルテオンの応援活動を通して、枚方校区ならびに枚方市を対象とする周辺地域の活性化に取り組んでいます。昨年度から摂大生も大阪ブルテオンを応援するメンバーとして、学生たちの若い発想を活かしながら、応援団や後援会、チームスタッフの方々と連携しながら活動しています。

2. 活動の内容

2024年度は下記の活動に取り組みました。

○枚方市について理解を深めフィールドワークを行う(6月～9月)

枚方市の施策や歴史・文化について学びを深めるため、市役所を訪問し、市民活動課とスポーツ振興課の取り組みについて意見交換を行った。また、枚方市文化観光協会のある鍵屋資料館を訪れ、枚方宿の歴史や文化資源について説明を受けた後、歴史街道や駅前でのフィールドワークを重ねた。

○学内サポーターの募集活動と学外でのプロモーション活動(9月～11月)

大阪ブルテオンの試合日程と FAL 演習の取り組みについて記載したチラシを作成(1000部)し、学内や枚方宿くらわんか五六市、試合会場等でチラシの配布による市内外の方々への周知を図った。また、当プロジェクトのインスタグラムを活用し、学内サポーターの募集と活動の様子について継続的な情報発信に取り組んだ。

○ホームゲーム活動の準備と実践(10月～2月)

今年度は学内でのミーティングを重ね、①選手への応援メッセージの収集、②来場者向けの QR コードクイズの実施といった 2 つの取り組みを主に行った。選手への応援メッセージはチームのロゴになるよう今回はカード型を用い、多くのファンや来場者からメッセージを得ることができた。また QR コードクイズも回答してもらえよう積極的に声掛けをし、全問正解者には景品を用意するなど、後援会の協力のもと試行錯誤しながら取り組んだ。さらに、後援会の活動として会場内のクリーンステーションでも来場者との交流が得られた。

3. 活動を通じた成果と学び(学生のコメント)

- その地域を知ってもらうために自分たちがまず知ることに。そして課題を見つけ、その解決のための改善を試行錯誤する力がつき、成長できたことでもある。
 - 自分はまず、コミュニケーションにおいて工夫することを意識した。大学生と企業や相手の組織とでは目的意識や言葉の使い方が異なることが多いのでその時のギャップを埋めるため、丁寧なやり取りや相手に伝わりやすい表現を意識する努力をした。また、複数人でのスケジュール調整、役割分担、進捗管理を行う中で、自分の責任を全うするために集中力を発揮した。そこで成長したことは自分たちの取り組みを企業や関係者にわかりやすく説明するプレゼンテーション力や仲間や企業の担当者と協力しながら、ひとりでは実現できない成果を出す経験を得られたこと。こうした活動を通じて、学内だけでは得ら
-

れない実践的なスキルや経験を積み重ねられることが大きな成長に繋がった。

- 課題解決に向かうために、自分で考えて意見を出すことができるようになった
- リーダーとして15人をまとめて、連携先の人と連絡をまめにする事が出来た。
- FAL 演習の活動を通して、自分の中で何が課題であるかを考え、それを解決するために行動する姿勢が身についたと思う。
- グループ内での発言の仕方についてよく考えるようになったと思う。自分の意見に根拠を添えて発言したり、他の意見を聞きながらそれに対して意見を持つようにもした。グループでは、とにかく非現実的でもアイデアを出すことや、活動への欠席はほぼ無いようにしていた。
- 課題に対してどう解決できるかを考えるときに円滑にミーティングを進めるための準備の仕方。
- 連携先の人や自分たちの活動に協力してくれる人たちに対して失礼のないように言葉遣いに気をつけた。
- 仲間と協力する大切さや、社会の厳しさを学ぶことができた。コミュニケーション能力や、周りを見る力は身についたかなと感じる。
- 昨年度から継続して活動したため、失敗を繰り返さないように頑張った。具体的に、スケジュール管理やミーティングの組み立てなど、スムーズにことを進められるに努力した。ビジネスなどにおける物事の考え方が身についた。
- 初めは何をしていけばいいのか分からなかったのが先輩の意見の真似や賛成したりするだけだったが、少しずつ自分の意見を言っていけるようになった。また、枚方市の現状を把握しどう知ってもらえばいいのかなどを考え実践する力を身につけることができたと思う。さらに、ファンの方々に話しかける際の注意点などを学ぶことができ、活動を行う前と比べて人に話しかける力が身についたと感じた。
- 自分の得意分野であるデザインを活かしてチラシを作成できたことは、このプロジェクトを知ってもらうきっかけになると考え、自分のデザイン力もさらに向上したと思う。



プロジェクト名 **野球の球団「兵庫ブレーバース」でのインターンシップ(ボランティア&業務改善活動)**

連 携 先 **兵庫ブレーバース(さわかみ関西独立野球リーグ)**

1. 活動実施の経緯

「兵庫ブレーバース」さんとは、担当教員の研究プログラムで「老人ホーム内からの画像を観客席内のスクリーンに映写して野球の応援をする社会実験」を実施してからのお付き合いです。

2. 活動の内容

日本各地には、NPBとは別の多数の「野球独立リーグ」が存在している。そのような球団の中から社会的起業の性質が濃い球団を選び、インターンシップの対象とした。この球団では、地元の三田市や神戸市と連携協定を結んで、地域貢献活動をしている。更に選手による近隣学校での「おはよう運動」や、球場周辺のゴミ拾いを行っている。本企画は、そのような球団の日常活動に参加しながら、スポーツビジネスの未来を学生と共に考察する企画である。2024年度は、球場内で大きな2つのイベントを行った。まず、2024年7月19日の球団主催試合が「ウガンダ・デー(JICA プレゼンツ)」であったので、そこに向けて、ウガンダ出身のカトー選手の等身大写真を撮影し、来場者がカトー選手と並んで写真が取れるようにした。またその写真を印画紙に焼いてプレゼントする観客歓迎企画を行った。また、ウガンダの紹介壁新聞を作成し球場内展示した。ついで、2024年8月9日の球団主催試合が「摂南大学・デー」であったので、そこに向けてチアリーディング部と交渉して、球場内で演舞してもらったり、始球式に登場してもらったりした。なお、本球団は、インターネットで全試合を配信するなど、先進的なファンサービス活動を実践している。さらに球場で盛り上がるように、昨年度からは応援団による応援がなされている。このような先進性の追求と地道なファンサービスの充実の両面をバランスよく進めている球団と連携することで、地域スポーツの未来を考えていっている。

3. 活動を通じた成果と学び

十分ではないが、日本のスポーツビジネスの問題、とりわけ、プロ野球界における、NPBによる独占体制の問題を歴史的・構造的に考えることができた。

SNS支援の形を考察する際に、NPBの事例を参照しながら行ったため、それらがどのような資源があって可能になっているかを具体的に考えることができた。また、「ウガンダ・デー」をJICAとともに盛り上げるなかで、社会の中で諸団体が連携して活動している様子を身近に感じた。自分や学友の個性が、事業改善構想の多様性につながることを理解する能力の獲得にまで、もう少しの所に至っており、複数年活動を選択している学生もいるので、この部分の深化を期待している。



プロジェクト名 **同窓会型スポーツのイベントマネジメント**

連 携 先 **全国高校野球 OB クラブ連合・マスターズ甲子園大会事務局**

1. 活動実施の経緯

全国高校野球 OB クラブ連合では、2004 年から全国の高校野球OB/OGが出身校別に同窓会チームを結成し、夢の舞台でもある甲子園球場を目指す「マスターズ甲子園」を開催しています。成人・中高年世代を対象とした生涯スポーツ文化の普及を進めていくなかで、夢への再挑戦による個々人や同窓会・世代間交流による地域の活性化、ユース世代への野球文化の継承と応援メッセージの発信等といった大会理念を形にしていくなかでプロジェクトです。2023 年度からは現代社会学部の学生も大会運営に加わり、神戸大学や関西大学、愛知東邦大学、九州共立大学等の学生や OB クラブ連合加盟校、企業などの様々な団体や個人と連携しながら活動に取り組んでいます。

2. 活動の内容

2024年度は下記の活動に取り組みました。

○予選大会出場チームを対象とした選手インタビュー(8月17日@むつみスタジアム(徳島市))

マスターズ甲子園徳島大会において、出場した4チームの選手に動画撮影を用いたインタビューと聞き取りによるインタビューを行い、インタビュー内容の編集と SNS への投稿に取り組んだ。

○大会公式ガイドブックの編集作業(9月)

大会事務局と連携を取りながら、出場する全 20 チームの担当を割り当てて、各チームの選手情報や校正作業などに取り組んだ。

○マスターズ甲子園 2024 運営委員会(10月8日~11月5日の毎週火曜日@神戸大学)

本大会に向けて、運営委員会を構成している他大学の学生と協働しながら、当日の選手インタビューや開会式に用いるプラカードやスタッフ・ボランティアの ID パスの作成などに取り組んだ。また、観客プロモーションについては、運営委員のメンバーと意見交換をしながら検討した

○マスターズ甲子園 2024 本大会当日(11月9日・10日@阪神甲子園球場)

今年度は①開閉会式・甲子園キャッチボールの運営、②出場選手へのインタビュー、③写真撮影、④ゲームレポートの編集、といった4つの部署で活動した。

○記録写真の整理とマスターズ甲子園公式インスタグラムへの投稿(11~12月)

大会後は記録写真のチェックならびにインタビューシートのデータ入力と整理を行い、公式インスタグラムに記事と写真を投稿した。

3. 活動を通じた成果と学び(学生のコメント)

- FAL 演習を通じて知らない人と 1 つの目標に向けて活動することによって、人として成長出来た。色々な視点から物事を考えられるようになった。
 - マスターズ甲子園には去年に続き 2 回目の参加であったが、去年と同様ではなく違う役割を任せられたり、去年より深く関わったりと新しい気持ちで取り組むことが出来た。特に役割が増えた事で、他大学とのコミュニケーションも同時に増え去年より人との関わりが多かった。これにより、イベントを開催、サポートすることは話し合いが必要不可欠で、話し合いをすることの重要性を知ったことと同時にコミュニ
-

ケーション能力が成長したように感じる。

- リーダーとして役割を振ったり、積極的に何事も自分で行動できた。
 - FAL 演習では自分から積極的に取り組むことが必要であり、観客プロモーションについて取り組むことが出来た。成長できたこと、身についた力は、アイデアを作り出すことである。どのようにして観客を集めるかや吹奏楽部に来てもらうかなど難しいことではあったがやりがいのあるものだった。
 - この FAL を通して、渡された資料のみで取り組むのではなく、その資料を見た上で自分自身で試行錯誤しながら活動していくことが大切だと気づき、実践することが出来た。
 - 活動を通して、スポーツを支える側という貴重な体験ができた。私は、主にインタビューを行ったが、選手がどのような思いでプレーをしていたのかなどを知ることができるいい機会になり、コミュニケーション能力や他人と会話を渉らせるためにはどのような工夫が必要なのかを学ぶことができたと思う。
 - たくさんの人と新たに関わる事ができ、交流を増やす事ができた。多くの仲間と協力する事もでき、良かった。甲子園内部やグラウンドに立ったり、選手にインタビューをしたりなど、普通に過ごしていれば経験のできない貴重な体験をいくつもする事ができ、とても充実したものとなった。選手へのインタビューや、私の場合写真撮影も行い、選手の一部始終を間近で感じる事ができた。その生き生きとした姿や、楽しそうな笑顔がすごく印象に残り、忘れる事は無いだろう。また、神戸大学の方や、ボランティアの写真撮影班の方など、幅広い年代の方と出会い、交流が広がり、中夜祭や忘年会に出席した事で、様々な知見も得る事ができた。この繋がりはこれからも大切にしていきたい。
-



田舎暮らしと新しい働き方の探究・発信

プロジェクト名

—「稲武(いなぶ)」で考える、持続可能な地域とは—

連 携 先 トヨタケ工業株式会社、OPEN INABU

1. 活動実施の経緯

トヨタケ工業は、愛知県の中山間地である稲武に本社がある、自動車向けのシートカバーを製造する会社です。この会社の横田社長は、自社の将来を視野に、過疎化と高齢化という地域の抱える問題の解決に取り組むため、移住促進・地域振興を目的とする OPEN INABU を立ち上げ、「週3日工場勤務、週2日ガイド」という働き方を提案しています。こうした考え方を学び、田舎暮らしの中でのワークライフバランスの実現と稲武を持続可能な地域にする方法について考えることが、本プロジェクトの目的です。

2. 活動の内容

(1)トヨタケ工業での活動

トヨタ生産方式やアップサイクルについて学び、工業用ミシンを使ってものづくりを体験しました。

(2)OPEN INABU PROJECT での活動

稲武観光協会の方々から郷土料理である五平餅の作り方を教えてもらい、一緒に作って食べました。また、農事組合法人「大野瀬 温(ぬくもり)」の方々から稲武での農業の様子や自然環境の現状を見せていただいたり、移住者の方々から稲武への移住のメリットとデメリットについてお話を聞いたりしました。

(3)マウンテンバイクの体験

車や自転車が通りやすいように整備された山間地の道を、マウンテンバイクで走りました。キャンプ施設と合わせて、このマウンテンバイクが、若い来訪者を増やすきっかけとして期待されていると知りました。

3. 活動を通じた成果と学び

当初、8月に4泊5日で実施する予定でしたが、台風の影響で一旦中止となり、日程調整を経て、12月に2泊3日で実施しました。それまでの間、オンラインミーティングをしたり、デスクトップリサーチに基づき稲武の魅力をSNS で仮想発信したりと、準備を重ねました。

現地では、交通アクセスや買い物など日常生活における諸問題を体感しました。その一方で、自然の豊かさや人びとの温かさ、また、白いトウモロコシ等の珍しい特産品や塩の道としての歴史に触れ、地域のもつ魅力を感じました。そして、休日には道の駅に沢山の人が訪れていて、平日とのギャップも目の当たりにしました。

まずは地域の魅力を知ってもらうことが重要だと考えました。しかし、SNS で発信しようにも高齢者ばかりなので、来訪者の多さを活かして、何らかのサービスと引き換えに発信してもらうという方法を考えました。また、買い物支援の必要性も強く感じながらも、地元で商売をしている人びとを守る必要性も感じました。



現地でお世話になる団体様と、オンラインミーティングをおこないました。



sabuu0 #稲武 #稲武町 #愛知県 #豊田市 #稲武グルメ #田舎暮らし #みねあさひ #か自然界隈 #どんぐり村 #水と緑とるれあいの街 #グリーピー #どんぐりの里 #幻の米 #粒はしっかり #粘りもあって冷めてもおいしい #稲武のい〜な！

愛知県豊田市の北東に位置する稲武地区。今日は緑豊かな稲武地区の魅力あるご当地グルメについて紹介します👉

- ◎米粉入りパン 🍞
幻の米、「みねあさひ」で作られた米粉のパンで、土日は長い行列ができます。
- ◎五平餅 🍡
漬したご飯を串焼きにしたものですお土産にもぴったり！
- ◎からすみ 🍡
米粉と砂糖を熱湯で練り上げて、蒸したお菓子のこと。桃の節句のひな祭りに、おひな様にお供えしちやいます🍡
- ◎生とうもろこし 🍷
新鮮はブランド野菜「稲武とうもろこし」
- ◎ミネアサヒ 🍷
職後に入手困難な幻の米、「みねあさひ」。濃いうま味と甘い香りが特徴です！やや小粒なミネアサヒは高級科学の寿司シャリ用としても好まれています🍷

現地に行く前に、デスクトップリサーチで稲武の魅力を SNS で仮想発信しました。



プロに指導してもらい、人生初の工業ミシンを体験しました。



工業ミシンを使って、自動車のシートカバーの廃材でペンケースを作りました。



五平餅は、つぶした米に甘めのたれを塗ったもので、とても美味しかったです。



地元の人々が整備した道を、マウンテンバイクで走りました。自然を満喫できりアクティビティです。

果物好きな若者を増やしたい！—生産者から販売までを知り、
プロジェクト名
皆さんにインスタなどの企画をお任せします♪

連 携 先 株式会社万果

1. 活動実施の経緯

株式会社万果は、おもに青果物を扱っている仲卸の企業です。日本では、生産地と消費地がどんどん離れていくなかで、若者の食への意識は薄れる一方です。物価が高騰するなか、果物は嗜好品として扱われ、果物離れは加速しています。FAL 演習では、果物の生産から消費までの流通の流れを学びながら、日本における果物離れを食い止めることを目的に活動を実施しました。

2. 活動の内容

○果物の流通に関する学び

9月5日に大阪市中央卸売市場にて、青果部のセリの様子を見学し、その後、果物の加工場を見学しました。学生は独特の口調で進められていくセリに圧倒されつつも、仲卸業社がどのように果物を仕入れているのかについて学ぶことができました。

○和歌山県紀伊由良町にて産地の見学

11月30日～12月1日に、和歌山県紀伊由良町へ訪れました。JA 紀州の協力を得て、ミカン生産者の方との交流、ミカンの収穫体験を実施しました。生産者の方から、農業の大変さや楽しさについて生の声を聞くことができ、学生にとっては大変貴重な経験となりました。また、ミカンの収穫のお手伝いをさせていただき、自分たちの身をもって、農業の大変さや農家の高齢化の深刻さについて学びました。

○スーパー三協にてミカン販売

スーパー三協(大阪府吹田市)の協力を得て、和歌山県産ミカンの店頭販売に参加しました。学生たちは、生産者から聞いたお話をもとにポップを作成し、売り場に飾ってもらいました。12月末の寒い時期でしたが、学生たちはお店の店頭立ち、頑張って声を出しながら、ミカンを販売しました。

3. 活動を通じた成果と学び

セリの見学や生産者との交流、ミカンの収穫・販売といった活動を通して、日本における流通システムや農家が抱える問題など、「食」にまつわるさまざまな知識を習得することができました。普段、コンビニやスーパーで、野菜や果物を見ても、なにも意識することはなかったと思うのですが、生産者の方が1年間大切に育てたミカンを収穫させていただいたことで、学生たちの食への意識が大幅に変わったように感じます。今年度の課題を次年度につなげていきたいと思えます。



プロジェクト名 **組織の抱える問題・課題を解決に導きながら、
働きがいを考えよう**

連 携 先 **株式会社 ONO plus**

1. 活動実施の経緯

株式会社ONO plus では、より良い製品を提供するための品質保証は？社員ひとりひとりがもつ能力、会社への貢献度などをどのように評価していく？従来ある会社の制度を見直し、より良い会社作りをしていくには？等の様々な問題を抱えています。このような企業が抱える課題に対してその解決策を考え、提案し、実践に繋げていけるようにするのが本プロジェクトとなります。そのために、現代社会学部の学生が株式会社 ONO plus の社員との方々と一緒に検討をしながら、課題解決に向けた活動に取り組んでいます。

2. 活動の内容

2024 年度は様々な課題がある中で、その課題について具体的に知ることから始めました。そのために、以下の活動を行いました。

① 株式会社 ONO plus の見学

株式会社ONO plus は世界トップレベルのフィルム加工会社です。本社は京都の伏見区、工場は宇治田原町や八幡市にあり、2021 年には埼玉にも工場を構え関東にも進出しています。毎年新しいことにチャレンジし続けている、活気ある中小企業です。課題を知る前に、その組織自体を知ることが大切となります。そのため、いくつかの工場の見学を行いました。

② 社員との交流・インタビュー

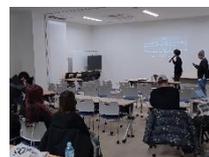
工場見学だけでなく、様々な部署の方々と交流を持ちました。工場見学で参加学生が疑問に思ったことやいくつかある課題を絞り、その課題解決に向けて各部門で働く社員の方々と話し合う場を設けて頂き、インタビューを行いました。

③ 課題を解決するための案を考える

社員の方々とインタビューを通して、課題解決に向けた提案がどのようにできるかを詳細に検討していきました。そのためには、インタビューの内容をまとめ、共通項を探る作業を行い、課題解決案を作成しました。

3. 活動を通じた成果と学び

今年度は新しいメンバー2 名と少数ではありましたが、実際の現場に入り、それぞれが見て、感じることで、様々な疑問や気づきを持つことができました。この疑問を本プロジェクトの担当の方と何度もやり取りし、そして様々なある課題の中から課題を絞り実際に社員の方々とインタビューを通して、課題解決に向けた提案を行うことができました。社会の中で働く人々の姿やその組織が抱える様々な問題や課題に触れることで、組織とは何か、働くこととは何かといった根本的なことを考えることができました。また、授業で学ぶ社会調査の知識を実践的に活用していく必要ありましたが、自分に必要な知識をどのように活かすべきか深く考えていける活動となりました。



プロジェクト名 **大阪の”凄い”中小メーカーの技術力を知ってもらい、次世代へ繋げる**

連 携 先 **株式会社ユーエイ**

1. 活動実施の経緯

周知のとおり大阪地域には、日本屈指の技術力を持つ企業がたくさんあります。各企業の技術力はかなり高く、業績も安定しているところが多い一方、そのほとんどが中小企業であるため認知度は決して高くないのが現状です。そのため企業がおこなう採用選考には人があまり来ず、どの企業も採用活動に苦勞をしており、その点で見れば全体として緩やかに産業が衰退に向かっているというのが現実です。他方で学生の側からみれば、「大手企業に入社する」ことだけが自身の幸せにつながる道だとも言い切れません。大手企業で活躍できるのはごく一部の者に限られているため、一旦大手企業に入ったもののつらい現実に直面した人びとが中途転職市場に多く溢れる、という流れもみられています。したがって現在では、採用選考における学生と企業のニーズがうまくいっていない、いわばマッチングがうまく機能していない状況にあるといえます。こうした事態を、大阪地域を起点として変えていきたい、というのが本プロジェクトの目的です。

2. 活動の内容

2024 年度は、実際の企業の現状を知るといった目的のもと、様々な企業を訪問しました。まだ広く知られていない中小企業の卓越した技術や独自の強みを知り、それを多くの人々に伝える、そのことでものづくりの魅力を発信し、企業の発展や業界の活性化にも貢献することを目指すというのが目的です。具体的には、MOBIO 東大阪ものづくりセンター、藤田金属、瑞光、霧のいけうちといった企業さまを訪問したり、未来ものづくり国際EXPO というイベントに参加したりしました。

また摂南大学キャリアセンターにも訪問しました。同じ FAL で 2023 年度に実施した調査結果について報告するとともに、就職部の具体的な活用方法について伺いました。しくみや支援体制と共に、就職活動の効果的な進め方などについても教えていただきました。



3. 活動を通じた成果と学び

実際に企業を訪問することで、製品のこだわりや企業の理念を肌で感じることができ、カタログやネットの情報だけでは得られない多くの気づきを得ることができました。今回の経験を通じて、日本のものづくりの素晴らしさを改めて認識することもでき、とても貴重な学びの機会となりました。こうした内容をふまえ、情報発信の内容や方法についての検討を今後より具体的に進めていきたい、と考えています。

またキャリアセンターを訪問したことで、自分たちが就職活動を行う際に大いに参考になる情報を得ることもできました。ですが今年度の活動のなかでは、キャリアセンターの具体的な使い方を周囲の学生に伝える機会を十分に設けることはできませんでした。このため来年度の活動では、より多くの学生が活用できるよう情報発信や説明の機会を作り、支援につなげていければと考えています。

プロジェクト名 **工場はまちのエンターテインメントだ！
—門真のものづくりの魅力を伝える**

連 携 先 **門真市役所 市民文化部 産業振興課、門真市内の中小企業**

1. 活動実施の経緯

FactorISM は、2020 年に始まった大阪の町工場によるオープンファクトリーイベントです。その中でも、門真市の工場が属する門真支部では、近年周辺の大学・高専・高校との連携をすすめており、学生たちが積極的に参画するようになってきました。摂南大学は、今回初めて現代社会学部「FAL 演習」の枠で連携することになりました。

2. 活動の内容

門真市役所のみなさまのご協力のもと、門真市や FactorISM について学び、今回参加する企業の工場を見学しました。また、「minahare PARK-FES.」や大阪国際大学「優花祭」にて行われた関連イベントにも参加しました。門真支部の企業との意見交換を経て、学生たちは、一瀬製作所・栗原木工・栄光技研・北次の4企業に分かれ、FactorISM 本番の活動をサポートしました。この成果については、関連する企業のみなさまの前で発表し、フィードバックを頂きました。

3. 活動を通じた成果と学び

中小企業についてのイメージが一新されるとともに、地域とのつながりの強さを体感しました。

【一瀬製作所】:さまざまな年齢層のお客様に対応することの難しさを学びました。一人ひとり異なるニーズや反応に柔軟に対応することの大切さを実感し、自分のコミュニケーション能力を見直すきっかけとなりました。社員の皆さまの働く姿勢やお客様との接し方を間近で拝見し、多くの刺激を受けました。一つひとつの業務に誠実に向き合う姿や、お客様に寄り添った丁寧な対応は、私たちにとってとても印象的で、学ぶべき点がたくさんありました。また、社員の方々からお話を伺う中で、仕事に対する誇りやプロ意識についても考えさせられる機会となり、自分自身の将来に向けての意識が大きく変わりました。

【栗原木工】:中小企業の現場を肌で感じる貴重な経験でした。普段は意識しない家具づくりの工程を間近で見て、職人の技術やこだわりに触れたり、実際にものづくり体験に参加して、ものづくりの奥深さを実感しました。また、学生の自分にもできる作業を通じて、「手を動かして支える」ことの意味を考えさせられました。またリール動画を作成して企業を PR したことにより、単なる見学ではなく、現場の一員として関わることで、中小企業の課題や魅力をより身近に感じられたのが印象的でした。

【栄光技研】:中小企業のイメージが大きく変わるほど強い印象を受けました。社員の皆様がアットホームな雰囲気づくりを心がけており、私たちも楽しく活動することができました。実際に提案したものが形になる経験を経て、この仕事の難しさや喜びを知ることができました。

【北次】:FactorISM のお手伝いや、缶バッジのデザインの制作を通して、人にもものを届けることができた反面、人に届けることの難しさを知りました。活動を通して地域の人々との交流を深めることもでき、実際に話することで新たな繋がりが生まれていくことを学びました。他にも、人に喜んでもらえる嬉しさや、人の役に立つものづくりの良さを学ぶことができました。



プロジェクト名 **中小企業が抱える経営課題をGDX で解決する**

連 携 先 **株式会社フォーバル**

1. 活動実施の経緯

日本の企業のうち、9割以上を占める中小企業は、大企業に比べて雇用創出効果が高く、地域に根ざした企業も多いため、地元の雇用を支えています。日本の従業者の約 7 割が中小企業で雇用されています。また、大企業が手がけないようなニッチな市場や地域に特化した製品・サービスを提供することで、消費者の多様なニーズに応えています。さらに、大企業は中小企業の優れた技術やノウハウを活用し、新たな製品やサービスを開発することで、日本の産業競争力を高めています。しかしながら、営業・販売力や人材確保の面で、課題を抱えている中小企業も多くいます。

そのような中小企業にたいして、GDX(グリーン・デジタル・トランスフォーメーション)を提案することで、課題解決を行っている株式会社フォーバルの業務に学生たちが参加しています

2. 活動の内容

参加した学生たちは、まずオフィスにおいて、ビジネスマナーを含めて、業務に参加するための研修を受けます。その後、フォーバル社の社員の営業に同行し、顧客の中小企業でのコンサルタント業務を経験しました。

3. 活動を通じた成果と学び

1年間を通じた企業での経験のなかで、中小企業において人手不足と新規顧客の開拓が課題になっていること、DX(デジタルトランスフォーメーション)を使うことで、データを使った作業の効率化や顧客に沿った営業ができるようになること、GX(グリーントランスフォーメーション)に取り組むことによるイメージの向上で新規顧客を獲得することへ繋がることを理解することができました。

また、ビジネスの現場で実践をとおして学ぶことで、説明資料を作成する力や相手に説明する力を身につけることができました。

1. 活動実施の経緯

特殊高所技術は、風車・ダム・橋などのインフラ・メンテナンスを行う企業です。時には風車やダムの上で、まるでスパイダーマンのような作業をします。インフラは「当たり前」の生活にとっても大切なものであるにもかかわらず、その意義・役割は十分に市民に知られていません。また、多種多様なインフラのメンテナンスには、個々人の個性・創造性や社会のつながり・絆が大切なのですが、そのことも十分に共通認識になっていません。こうした課題の解決に向けて、本プロジェクトは始動しました。

2. 活動の内容

本年度は特に、すべての人々がインフラを適切に享受できる社会の創造に取り組みました。まず「ハンディキャップとは何か」について議論・学習しました。次にハンディキャップをもつ人々に対する「ヘルプ活動」に実際に取り組み、そこでどのような困難があるのかを実感・解明しました。そして健常者のヘルプ活動においてもさまざまな困難があることをふまえ、「逆ヘルプマーク(仮称)」を考案しました。ヘルプを求める人々の中には、すでに「ヘルプマーク」がある程度、普及しています。「逆ヘルプマーク」があれば、支援を必要としている人も声をかけやすいと考えたわけです。また「ヘルプマーク」がどの程度、社会に浸透しているかを、摂南大学生 90 名を対象に調査しました。ハンディキャップをもつ方々への聞き取り・運営方法の検討などは、今後の課題として残りました。

3. 活動を通じた成果と学び

本プログラムの最大の特徴は、学生自身が社会の課題やなすべきことを自ら考え、議論し、企画・提案・実践していくことにあります。特殊高所技術の方々は、そうした学生の提案・実践を尊重し、つねに適切にサポート・バックアップをしてくださいました。そこで、活動を通じた最も大きな成果は、学生自身が実際の社会での活動を通して具体的な課題を発見し、その解決に向けて、新たなアイデアを出し、必要に応じて調査も実施し、一步一步活動を前進させていく総合的・協働的な能力が身につくことです。特殊高所技術の皆さんの柔軟で粘り強い指導・アドバイスにより、学生の創造性・企画実践力を引き出していただけました。



1. 活動実施の経緯

夜間中学は、年齢や国籍を問わず、子ども期に基礎的な教育を十分に受けられなかった義務教育未修了者や、不登校で十分に学校に通ってなかった形式卒業生、渡日して日本語学習や基礎的な学びを必要とする外国人等が学ぶ学校である。守口市で 50 年以上存続してきたさつき学園夜間中学と連携し、日常的な学習や行事等をサポートしながら、社会的マイノリティの置かれた現状や課題、多文化共生社会の実現のために必要なことなどを考えるためにプロジェクトを開始した。今年度は、新たに、神戸市の識字教室ひまわりの会との連携も構想していたが、活動拡大には至らなかった。

2. 活動の内容

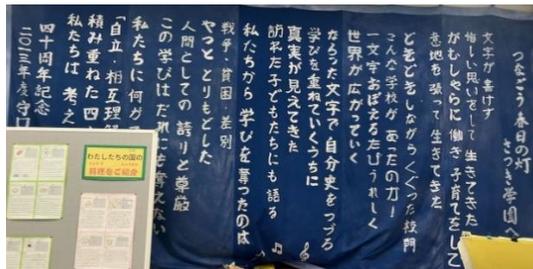
夜間中学には、10 代後半から 90 代まで、多様な年代・国籍の生徒が在籍している。生徒の国籍は 12 に上り、中国(42 名)、日本(38 名)、ネパール(24 名)が特に多い。また、10 代後半から 20 代の若年者の入学が増加傾向にある。今年度は、主に 1～3 時間目の日本語学習を基本とするクラスのサポートに参加した。来日したばかりでほとんど日本語があまりわからない生徒の隣で関わりながら、若者同士で仲良くなる場面も見られた。

今年度は、近畿夜間中学校生徒会連合会の行事(連合運動会等)には参加が叶わなかったが、2 限後の休憩(補食給食)時間に行われる生徒全体の交流会等で、日本語クラス以外の生徒さんの様子にも触れることができた。

3. 活動を通じた成果と学び

まず、ほとんど知られていない夜間中学という学びの場にいる人々との出会いを通して、十分に教育を受けることができず日々困難を感じている社会的マイノリティの存在を知ることができた。人に何かを伝え、教えることの難しさや、学びの喜びを感じる機会にもなった。学生からは、夜間中学生の学びから「教育の力」を深く感じたとの感想もあった。若年の外国人生徒とは、文化的背景が異なるものの、共通する若者文化を受容していることから、親しくなる姿も見られ、草の根の多文化共生のあり方を考えることができた。

今後はさらに、義務教育未修了者や外国人の日本社会で置かれた立ち位置や制度上の課題等についても理解を深めることが課題である。また、学習サポートを超えた大学生ならではの夜間中学に対する貢献のあり方に関しても、継続した連携の中で模索していきたい。



プロジェクト名 在日コリアンが見つめる日本の姿を知る

連 携 先 一般社団法人 神戸コリア教育文化センター

1. 活動実施の経緯

一般社団法人 神戸コリア教育文化センターは 25 年にわたって日本の公立小学校に通う在日コリアンの子どもたちにルーツの国のことばと文化(継承語・継承文化)を伝える民族学級の運営を行ってきました。また2024年12月に神戸におけるコリアンルーツの人々の歴史の中のくらしとことばを伝えるミュージアムを開設しました。

2017年以来、神戸大学の学生が関わってきた毎週土曜日の公立小学校で開催されている継承語学級への支援や12月の継承文化発表会の準備にFAL の学生もともに参加することになりました。

2. 活動の内容

2024年度本プロジェクトの FAL 活動に参加した学生はアーティストや研究者と共に、ミュージアムづくりの話し合いに参加したり、長田(神戸の在日コリアンの多住地域)の街を歩くフィールドワークにアシスタントとして参加しました。

また2024年8月～2025年1月にかけて毎週土曜日の神戸市立蓮池小学校で開催された継承語学級に参加しコリアルーツの子どもたちの学びをサポートし、12月15日に開催された継承文化発表会では FAL の学生も演者として農楽(プンムルノリ)に参加するなど大活躍をしました。

12月15日の継承文化発表会の様子は摂南大学の HP にも紹介されました。

<https://www.setsunan.ac.jp/news/detail/7237>

3. 活動を通じた成果と学び

コリアルーツの子どもたちと共に汗を流し、彼らのルーツの国の文化を学び、学んだことを日本の子どもや教師、地域の人々に伝えるという活動を通じて、FAL 参加学生は学校の中だけでは得られない学びが地域にはあることを、学校以外の居場所を持ち、学校以外の価値観の存在の重要性を体感しました。また継承語学級や継承文化発表会を運営するボランティアの学校教員の皆さんやミュージアム設立にかかわるアーティストや研究者の大人たちと意見を交わした経験はかけがえのないものになりました。ミュージアムのロゴマークを決める話し合いでは「瑞々しい感性を持つ若者代表」として意見を述べ、彼らの意見が採用されるなど、やりがいを感じる場面も多くありました。



プロジェクト名 多文化共生のまち、大阪を見つめる

連 携 先 富田林国際交流協会、せつつ地球村

1. 活動実施の経緯

富田林市の公立小学校中学校に通う子どもたちへのサマースクールやサマーキャンプを行い、子どもたちを支援すると同時に地元の小中学校の新人教員への研修の場を提供している富田林国際交流協会の活動に2024年から摂南大生も FAL 活動の一環として参加させていただきました。外国につながる子どもたちの学び、新人教員の試行錯誤を間近に見、ともに悩み考えることで教室の中の多文化化を実感を持って理解する機会とします。

また、せつつ地球村では地域の中で暮らす外国ルーツの子どもたちの居場所活動に参加し、イベント作りを通じて多文化な地域づくりには何が必要か考えました。

2. 活動の内容

富田林国際交流協会では、7月22日から25日までのサマースクールで富田林の新人教員やボランティアと共に富田林に暮らす外国ルーツの子どもたちの夏休みの宿題を支援し、お母さんたちのルーツの国のお料理に舌鼓を打ち、ルーツの国の遊びを紹介してもらいました。9月には1泊のキャンプでも外国ルーツの子どもたちと新人教師と共に、自分らしさを隠さずに勉強や遊びに取り組む子どもたちと共に過ごしました。

せつつ地球村では毎週土曜日の子どもの居場所活動や、夏祭りやオレンジリボンフェスタなどに参加し、居場所やイベントを運営することを学びました。

3. 活動を通じた成果と学び

富田林に集まる子どもたちは外国ルーツの子どもといっても一見普通の子どもと変わりはないと当初、学生たちは感じていました。しかし、やがて子どもたちが家族と話すときは母語で友達と話すときは日本語で話し、言語を使い分けていて、ふたつの言語の間を行き来して生活していることに気づきます。ひるがえって自分たちは日本語だけの1つの言語の世界で生きていることを実感しました。違いを楽しむ子どもたちの姿に学ぶことも多かったと語っていました。

せつつ地球村では<子どもたちの居場所をつくること>について学生たちが考え議論を交わしました。「こうであるべき」というルールや固定概念にあまり縛られることなく、いろんな考え方を持つ子どもたちの意見を尊重することや、いつでも迎え入れられる場所の重要性について語り合われました。



三重県いなべ市でのまちかど博物館を活用した地域プロモーション企画

プロジェクト名

連携先 一般社団法人グリーンクリエイティブいなべ、一般社団法人まちライブラリー

1. 活動実施の経緯

人の集まる地域の居場所(サードプレイス)として、様々な分野のコレクターが、自らの自宅にあるコレクションを多くの人に見てもらって交流するために開放しているまちかど博物館で有名な三重県いなべ市では、様々な地域づくりの営みが行われています。このプロジェクトでは、いなべ市で地域づくりに取り組む一般社団法人グリーンクリエイティブいなべのコーディネートで、いなべ市内で地域づくりのユニークな活動に取り組んでいる人達に取材し、その内容を大阪の森の宮キューズモールで一般社団法人まちライブラリーが開催した「ブックフェスタジャパン 2024」の中で、学生達がトークイベントを企画して報告するとともに、YouTubeLive やコミュニティFMの番組でも紹介しました。

2. 活動の内容

- 6月にまちライブラリー@もりのみやキューズモールのサポーター会議(もりの会議)に参加
- 7月に一般社団法人グリーンクリエイティブいなべ関係者と打ち合わせして事前勉強
- 9月にいなべ市を訪問し、まちかど博物館関係者を始め、様々な地域づくり活動に取り組む人達に取材
- 10月に「ブックフェスタジャパン 2024」の中で、取材した三重のユニークな地域づくり活動を紹介するトークイベントを開催
- 1月に YouTubeLive の番組でプロジェクトの活動について紹介
- 3月に奈良のコミュニティ放送局「FMまほろばの」のトーク番組でプロジェクトの活動について紹介

3. 活動を通じた成果と学び

2人1組で1時間半の非構造化インタビューを現地で計7回行い、取材したことを自ら企画した公開トークイベントや YouTubeLive での配信やコミュニティ放送局を通して発信し、地域づくりの多様な取り組みについて学ぶことが出来ました。



大阪府河内長野市滝畑での地域の人達との映像制作ワークショップ

プロジェクト名

アップ

連携先 **映像発信てれれ、一般社団法人まちライブラリー**

1. 活動実施の経緯

大阪府河内長野市の過疎集落の滝畑にある映像発信てれれは、地域で映像ワークショップを行ってそこで制作した映像の上映会を行って交流する取り組みを行っています。今回、このプロジェクトでは、映像発信てれれの協力により、学生達が泊りがけで現地に行き映像制作ワークショップを体験するとともに、スマホを使ってショートドキュメンタリー作品を制作しました。

2. 活動の内容

○6月にまちライブラリー@もりのみやキューズモールのサポーター会議(もりの会議)に参加

○7月、8月に日帰りで滝畑に通って、映像制作ワークショップに参加するとともに、作品を撮るためのロケハンを行う

○9月に滝畑での撮影合宿を行い、撮った素材を編集して2本のショートドキュメンタリー制作

○10月に森ノ宮キューズモールで開催された「ブックフェスタジャパン」の中のイベントとして、上映会と報告会を開催

○11月に立命館大学で開催されたメディフェス in 関西のイベントの中で作品上映、また映像発信てれれが独自に企画した上映会でも何度か上映される

○1月にYouTubeLiveの番組でプロジェクトの活動について紹介

3. 活動を通じた成果と学び

現地でのロケハンと並行して、Vllo、InShot等の動画編集アプリを使った映像編集について勉強し、映像制作のスキルを習得するとともに、取材したことを自ら企画した公開トークイベントやYouTubeLiveでのトーク番組の配信を通して発信し、映像を活用した地域づくりの取り組みの可能性について学ぶことが出来ました。



京都の市街地で地域の人達と映像番組制作配信を通じた地域活性化の企画

連 携 先 一般社団法人まちライブラリー、筒井ラーニング Lab

1. 活動実施の経緯

2011年に大阪で誕生したまちライブラリーは、今日、本を媒介にした人の集まる地域の居場所(サードプレイス)として、全国各地に1000以上のまちライブラリーが緩やかなネットワークを形成するようになりました。そうしたまちライブラリーの中から、学生達が京都市を中心とした各地のまちライブラリー取材し、その魅力について、YouTubeLiveの配信とコミュニティFMの番組での配信を通して伝える取り組みを企画しました。

2. 活動の内容

○6月にまちライブラリー@moriのみやキューズモールのサポーター会議(もりの会議)に参加し、まちライブラリーがどのようなものか各自勉強

○10月、11月に京都市、及び奈良市のユニークなまちライブラリー5カ所を訪問し、オーナーにインタビュー取材するとともに、その魅力について、YouTubeLiveのトーク番組で配信。

○12月に京都、奈良の中心市街地のまちライブラリーとは異なる、京都丹波の里山に囲まれた田園地帯にある巣箱型のまちライブラリーについて、綾部市で取材

○1月、2月に奈良のコミュニティ放送局「FMまほろばの」のトーク番組で、まちライブラリーの魅力について紹介する番組を放送

3. 活動を通じた成果と学び

2人1組で1時間半の非構造化インタビューを京都と奈良のまちライブラリー関係者に計6回行い、取材したことを、自ら企画した公開トークイベントやYouTubeLiveとコミュニティ放送のトーク番組を通して発信し、様々なフィードバックを得ることで、人の集まる地域の居場所(サードプレイス)が地域で担う役割について学ぶことが出来ました。



まちライブラリー@ちとせでのブックフェスタジャパン 2024 の プロジェクト名

イベントの企画

連 携 先 まちライブラリー@ちとせ

1. 活動実施の経緯

2011年に大阪で誕生したまちライブラリーは、今日、本を媒介にした人の集まる地域の居場所(サードプレイス)として、全国各地に1000以上のまちライブラリーが緩やかなネットワークを形成するようになり、毎年9月から10月の2カ月間、北から南に日本列島を縦断する本のイベント、「ブックフェスタジャパン」を行っています。9月初頭に北海道の千歳市で開催されるオープニングイベントと、10月に大阪で開催されるイベントで、学生達が各地のまちライブラリー取材し、魅力について伝えるトークイベントを行うとともに、YouTubeLiveの番組で配信する取り組みを企画しました。

2. 活動の内容

○6月にまちライブラリー@もりのみやキューズモールのサポーター会議(もりの会議)に参加

○7月、8月に関西(大阪、兵庫)のユニークなまちライブラリー5カ所を訪問し、オーナーにインタビュー取材

○9月に北海道で「ちとせまちライブラリー ブックフェスタジャパン 2024」に参加し、前夜祭で関西のユニークなまちライブラリーについて紹介するとともに、千歳科学技術大学の学生達と合同で学生による本をテーマにしたトークイベントを行い、「ちとせまちライブラリー ブックフェスタジャパン 2024」の運営にボランティアスタッフとして参加し、また北海道のまちライブラリー関係者に取材

○10月にもりのみやブックフェスタ 2024 の植本祭に参加し、古本市で古書販売を行うとともに、取材した北海道のまちライブラリーの魅力を伝えるトークイベントを開催

○1月にYouTubeLiveの番組でプロジェクトの活動について紹介

○3月に社会人のインフォーマルネットワークである関西ネットワークシステム(KNS)の定例会で、プロジェクトの活動報告

3. 活動を通じた成果と学び

2人1組で1時間半の非構造化インタビューを関西と北海道のまちライブラリー関係者に計7回行い、取材したことやボランティアスタッフとして参与観察したことを、自ら企画した公開トークイベントやYouTubeLiveの番組での配信を通して発信し、様々なフィードバックを得ることで、人の集まる地域の居場所(サードプレイス)が地域で担う役割について学ぶことが出来ました。



プロジェクト名 MBS の PR 活動を通じたマーケティング調査

連 携 先 毎日放送

1. 活動実施の経緯

若年層における動画利用におけるアンケート調査を実施と分析をおこない民放テレビ局が実施するプラットフォームビジネス TVer の利用促進に向けた基礎資料を作成しました。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
レクチャー&ディスカッション 情報を理解し伝えることについて基礎的な学修を実施	摂南大学(毎週金曜3限)
メディア企業への見学・体験 新聞社・放送局へ見学とコンテンツ発信の体験をおこなった	京都新聞社・毎日放送
アンケートの実施と分析 夏のオープンキャンパス(2日間)にて高校生を中心に動画利用に関わるアンケート実施と分析	摂南大学
各種イベントにおける情報発信の実施 放送局の実施する学びイベントの企画・運営や SDGs に関わるロハスフェスタにて PR 動画作成	毎日放送・ロハスフェスタ

3. アンケートを通じた成果と学び(主なもの)

- ・TVer,YouTube,TikTok など配信プラットフォームの UI による使いやすさの違いや、そもそものアプリのコンセプトの違いが関係している
- ・自由に使える時間を確保するために睡眠時間を削り、他の作業と並行して「ながらみ」をする人が多いことがわかった→動画視聴が生活の一部になっている z 世代が多数と言える
- ・「ながら見」をする人とならない人で一日の平均時間に大きな差がない→ながら見の有無は動画視聴時間を決定づける要因にはならない



プロジェクト名 MBS における番組イベントの参加者意識に関する調査

連 携 先 毎日放送

1. 活動実施の経緯

毎日放送の実施するイベント会場にて、イベントに関するアンケート調査を実施と分析をおこない、今後のイベント企画・運営にフィードバックする資料を作成

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
レクチャー&ディスカッション 情報を理解し伝えることについて基礎的な学修を実施	摂南大学(毎週金曜3限)
メディア企業への見学・体験 新聞社・放送局へ見学とコンテンツ発信の体験をおこなった	京都新聞社・毎日放送
アンケートの実施と分析 放送局の実施する「学びイベント」に参加しアンケートを実施と分析をおこなった	毎日放送
各種イベントにおける情報発信の実施 放送局の実施する学びイベントの企画・運営や SDGs に関わるロハスフェスタにて PR 動画作成	毎日放送・ロハスフェスタ

3. 活動をを通じた成果と学び(主なもの)

- ・生物多様性という言葉を知っている人が思ったより少なかった→情報を伝える重要性
- ・生物多様性という言葉を知ってもらうにはどうすればいいかを考えることにつながった
- ・イベントを通して、参加してくださった人たちが生物多様性の意識に変化があったことがグラフを通し理解できた



プロジェクト名 MBS における SDGs 活動に参加

連 携 先 毎日放送・生物多様性センター

1. 活動実施の経緯

生物多様性をテーマとして特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」について学び、毎日放送の実施するイベントにて企画・運用を通して、来場者への学びにつなげた。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
レクチャー&ディスカッション 情報を理解し伝えることについて基礎的な学修を実施	摂南大学(毎週金曜3限)
メディア企業への見学・体験 新聞社・放送局へ見学とコンテンツ発信の体験をおこなった	京都新聞社・毎日放送
SDGs イベントの企画および運営 放送局の実施するイベントの企画・運営にて生物多様性について、来場者に伝えた	毎日放送
各種イベントにおける情報発信の実施 放送局の実施する学びイベントの企画・運営や SDGs に関わるロハスフェスタにて PR 動画作成	毎日放送・ロハスフェスタ

3. 活動を通じた成果と学び(主なもの)

- ・特定外来生物に関する脅威などを知ることができた
- ・イベントを通じて、人(子ども)との関わりを学ぶきっかけになった。
- ・メディアの【伝える】までの過程と重要性を知ることができた
- ・前年の活動の課題点を改善することができた。



プロジェクト名 地域メディアとしてのネットメディアの仕事とその役割

連 携 先 株式会社 morondo(枚方つーしん)

1. 活動実施の経緯

地元密着型のネットメディアの情報に関わる仕事について取材を通じて体験し、テレビや新聞といった広域の情報発信との違いを理解し、地域とそこにクラス人をテーマとして地域の再発見をおこなった。

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
レクチャー&ディスカッション 情報を理解し伝えることについて基礎的な学修を実施	摂南大学(毎週金曜3限)
メディア企業への見学・体験 新聞社・放送局へ見学とコンテンツ発信の体験をおこなった	京都新聞社・毎日放送
ネットメディアでの取材活動 地域密着型のネットメディアでの取材活動に参加し、実際に記事作成までおこなった	morondo
各種イベントにおける情報発信の実施 放送局の実施する学びイベントの企画・運営や SDGs に関わるロハスフェスタにて PR 動画作成	毎日放送・ロハスフェスタ

3. 活動を通じた成果と学び(主なもの)

- ・取材や記事作成を通じてコミュニケーションの重要性を学んだ
- ・課題も明らかになり今後の改善点が見えてきた
- ・取材準備や連携体制の強化と重要性を感じた
- ・地域メディアの価値向上が期待されると感じた



プロジェクト名 ロハスフェスタにおけるプロモーションの検討および実施

連 携 先 ロハスフェスタ・放送映画製作所

1. 活動実施の経緯

SDGs イベントとしてのロハスフェスタに関しては、若年層の参加が課題となっている。そこで若年層に向けたイベントに関する PR 活動を実施する

2. 活動の内容

本年度は下記の活動に取り組みました。

活動内容	活動場所
レクチャー&ディスカッション 情報を理解し伝えることについて基礎的な学修を実施	摂南大学(毎週金曜3限)
メディア企業への見学・体験 新聞社・放送局へ見学とコンテンツ発信の体験をおこなった	京都新聞社・毎日放送
ロハスフェスタにおける情報発信 SDGs に関わるロハスフェスタにて PR 動画作成を作成し若年層への情報発信をおこなう	ロハスフェスタ
その他イベントにおける情報発信の実施 放送局の実施する学びイベントの企画・運営やアンケート活動に参加	毎日放送

3. 活動を通じた成果と学び(主なもの)

- ・ ショート動画の限られた時間の中に、自分たちの活動をどれだけわかりやすく収めるかという動画構成を決めることに工夫した
- ・ 撮影した多くの写真や動画の素材の中から、良いものを選択することに苦労した
- ・ 動画の秒数に合わせて、テキストの速さを編集することが難しかった
- ・ ひとつの動画を作成するのに、時間がかってしまった



「ふるさと門真まつり」を盛り上げよう

プロジェクト名

—イベントの企画・運営のノウハウを学び、醍醐味を味わう—

連 携 先 門真市役所 地域政策課ほか

1. 活動実施の経緯

門真市は、地域の夏祭りである「ふるさと門真まつり」に力を入れています。この祭りの運営に学生が協力させてもらいながら、学生にしかできないこと、また、どのようにしたらうまくいくかということを考え、現場の社会を経験するのが本プロジェクトです。

今年度は、昨年度の履修生が提案したイベント案を具体化し実行に移すという課題に、1年生と2年生、合わせて15名が取り組みました。うち2名は、昨年度からの継続参加です。

2. 活動の内容

丸シールアートとお化け屋敷というイベント案を具体化し、実行に移しました。

(1)花火の丸シールアート

「ふるさと門真まつり」は市街地で開催されるため花火を打ち上げることができません。そこで、門真市の姉妹都市である兵庫県美方郡香美町の「香住ふるさとまつり海上花火大会」で実際に打ち上げられた花火の写真を元に、丸シールアートを作成することにしました。

学生たちは、門真小学校とはすはな中学校に出向き、生徒さんたちにシールの貼り方を指導し、一緒に制作しました。小中学校に協力を依頼するための動画も、みんなでつくりました。

(2)お化け屋敷「変な部屋—ナニカがいる」

お化け屋敷は、話題になった小説(映画)『変な家』を文字って「変な部屋」と名付けました。不動産屋の紹介する物件が事故物件という設定で、不動産屋に扮した学生が物件説明をしながらお客様を入口へ案内するが、理由をつけてお客様だけで入場してもらう、ということにしました。

企画段階では、太秦映画村にあるお化け屋敷に行き、怖がらせ方やコンセプトの重要性、また、必要な備品(説明書など)について学ぶことができました。間取りに合わせて通り道(仕切り)を考え、場所ごとに仕掛けを用意し、ペットボトル・新聞紙・血のりを使ってゾンビ人形を複数体作りしました。

3. 活動を通じた成果と学び

お化け屋敷の具体化がなかなか進まず、6月の時点では実施が危ぶまれました。しかし、コンセプトを決定して、間取りを設定し立体的に見ることが出来るアプリを導入したことで、一気に進んでいきました。6～7月に、空き時間を利用して人形や小物等を制作していきました。途中、学生同士の連携がうまくいかず、作業に遅れが生じるトラブルもありましたが、徐々に協力的になっていきました。そして、現地に入ることができるわずかな時間でリハーサルを行い、8月3日(土)の当日を迎えました。

「変な部屋」には、16時～21時の約5時間で延べ842人のお客様が来ていただきました。1時間以上の“待ち”が出るほどの人気で、今年度の「まつり」において最も集客したイベントとなりました。

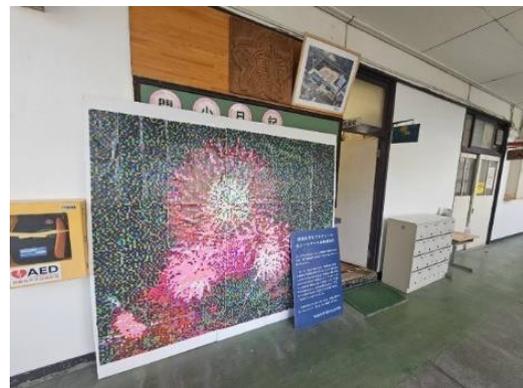
学生たちは、計画性と協調性の重要性を学びました。また、企画を具体化していく段階では、さまざまな立場の人々がいることの想定と「遊び心」の必要性も痛感しました。当日の達成感と喜びは、

努力と苦勞の大きさに比例していると感じました。

「まつり」後は、市役所の方々と連携して次年度のイベント案を考え、実行委員会で発表しました。その過程で、企画をする際には、実行可能性と具体性が重要であることを学びました。



門真小学校で、丸シールアートの作り方について学生が生徒さんたちに説明しました。



丸シールアートは、祭り後、ららぽーと門真に展示され大きな反響を呼びました。現在、門真小に寄贈されています。



手作りの、血のり付き死体人形。暗い所で見ると、本物の人間のように見えます。



お客様を案内する、不動産屋に扮した学生



「変な部屋」への入場を待つ人々の大行列



門真市役所職員のおふたり(両端)と学生15名、そして岩井八郎先生

総合的観光・食イベント「SAKE Spring」の実施を通じたグローバルプロジェクト名

バルな産業振興

連 携 先 株式会社 のぞみ

1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、京都／関西／日本／海外という階層性とそれぞれのフェーズが持つ強みや特性を活かしながら、一方では京都を拠点にローカルとグローバルの両側面を体感することができる観光イベントを実施し、ローカルとグローバルの双方が大切にされる現代社会の共生のあり方を理解するとともに観光産業・食産業の特性を活かした経済活性化のための方策を理解すること、そして、これらを達成するためのマクロデータに基づく分析力を身につけることを狙いとしてスタートしました。連携先であるのぞみ社は、「京都の魅力をも日本へ、世界へ。」をテーマに、夢をかなえる観光ツアーや、街おこしのための観光イベント、オンリーワンの旅を企画される会社です。魅力ある取り組みを数多く実践されている中で、代表的なものとして、総合的観光・食イベント「SAKE Spring」があるのですが、2024 年度は諸般の事情でイベント自体が実施されなかったため、綿密なリサーチに基づく「企画提案」を軸とした活動実践を行うことになりました。

2. 活動の内容

総合的観光・食イベント「SAKE Spring」とは、「日本酒の新しい可能性を広げる！」をコンセプトに全国で展開するきき酒イベントです。京都で始まった同イベントは、日本酒に関する食イベントの中では日本最大級の規模を誇ります。しかしながら、ほぼ全員が 20 歳未満だったことから、参加学生は当然「日本酒」など飲んだこともなく、全員が京都出身でもありませんでした。だからこそ、キーワードを定めて徹底的なリサーチを実施し、参考になりそうなフードイベントを自分たちで見つけて(テレビ大阪 YATAI フェス! 2024)フィールドワークを行い、連携先企業への企画提案にこぎつけました。すると、連携先企業の社長から大絶賛を受け、最終的には「企画案は申し分ないが、(参加学生と)同年代である」若者に伝わらないと嘆いたため、PR 案を考えることにしよう。」と、前向きな方向転換を伴う次なる課題をご提示いただくことになりました。それについても、独自にデータ収集に取り組むなど、積極的に取り組み、諸般の事情でオンデマンド形式の最終プレゼンテーションになったのですが、連携先より温かくも厳しい、長文の励まし・フィードバックをいただき、活動を終えることができました。

3. 活動を通じた成果と学び

連携先からご指摘・ご助言をいただくことで、データを活用することと、どの立場・土の目線から企画を練り上げるべきなのかを明らかにすることの重要性について学ぶことができました。その結果、非常に立派なプレゼンテーション資料を作成することができました。しかしながら、自分たちの考えを大切にあまり、ご助言をいただくまで視野が狭くなってしまったこと、またご助言をいただいからは逆にアイデアが枠から飛び出しづらくなったことなど、真面目さが逆方向に働いてしまいました。もっとも、バランスの大切さに気付けたのは、FAL 演習ならでの成果と言えるでしょう。

プロジェクト名 働く人々の地域コミュニティを体験する

連 携 先 ワーカーズコープ

1. 活動実施の経緯

ワーカーズコープは、労働者が出資して事業を立ち上げ、共同で経営する団体です。事業の内容は、地域の人々の生活課題・困り事の解決です。地域の諸問題をボランティアではなく、収入に結びつく「仕事」として取り組み、人間らしい地域づくりと仕事づくりを統一して実現していくことを目指す新しい「働き方(協同労働)」です。この取り組みに参加し、「働くこと」の意味を深く考えるとともに、多様な地域課題の主体的解決に取り組む人々の姿を実践的に学ぶことを目指し、本プロジェクトは始動しました。

2. 活動の内容

まずワーカーズコープの理念、および、全国各地の事業所の実践例について学びました。次いで、実際にワーカーズコープが運営する、吹田市の「高齢者憩いの家」、および、西宮市の諸施設で活動に参加しました。

「憩いの家」では、高齢者向けのスマホ・パソコン教室で、年賀状の作り方や LINE などの使い方を教えました。また高齢者の皆さんとのクイズ大会は大好評でした。芋ほりなど畑仕事、植樹、太陽熱クッキングにも取り組みました。

西宮市では、学校に行きにくい子どもたちの居場所(「ろばのいえ」)でさまざまな活動を行い、学童保育でも子どもたちと遊んだり、勉強をしました。

3. 活動を通じた成果と学び

普段の生活ではまったく体験できない体験ができ、とても有意義でした。上下関係がなく、対等な立場で働く人々の様子、何でも話し合っ決めていく働き方を目の当たりにして、「働く」ということについての意識が変わりました。異なる世代が交流することの大切さ、社会の中で役割を担うにあたっての責任感、クイズ大会をはじめ多様な企画や工夫の大切さなど、多くのことを学びました。



1. 活動実施の経緯

本プロジェクトは、担当教員の江口がかつて東日本大震災・福島原発事故の被災地で学生ボランティアと活動に取り組んだ際の経験と人脈を生かし、震災・原発事故の経験を関西在住の大学生に伝え、地域の未来を考えることを目標に新規に立ち上げたものである。福島県を拠点に多様な被災者支援・復興・地方創生活動等に取り組む NPO 法人コースターの坂上英和氏の協力を得て、今年度はスタディと交流を中心に企画した。また、プロジェクト立案においては、東北大学加害・ボランティア活動支援センターからも助言を得ることができた。

2. 活動の内容

今年度は、事前にオンラインでの学習・交流を深めた上で、9月に3日間の日程で福島県沿岸部を訪問した。

1 日目は、福島県いわき市にて、地震・津波による被災者が入居する市営団地と原発避難者が入居する県営団地との交流イベントを開催し、震災直後の経験を学んだ。2 日目は、東日本大震災・原子力災害伝承館、震災以降浪江町立請戸小学校を訪問して震災について理解を深めた上で、富岡町で子育て支援を中心に帰還地域のコミュニティづくりに取り組む鈴木みなみ氏、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校に附設する認定 NPO 法人カタリバ「双葉みらいラボ」のスタッフの皆さんから、取り組みの現状や課題についてお話を伺った。3 日目は、広野町で多世代交流スペースがらっとあつとを運営する青木裕介氏からお話を伺った後に現地を視察し、被災地に限らず、地域に誇りを持てるシビック・プライド育成の可能性について考えを深めた。

3. 活動を通じた成果と学び

今回の訪問を通して、東日本大震災・福島原発事故から 13 年を経た現在、福島がどのような状況にあり、福島で暮らす人々が何を感じ、未来について何を考えておられるのか、ほんの一端であるが理解を深めることができた。そして、福島県以外の原子力発電所の存在、今後発生が予想される南海トラフ地震に対する防災、過疎地域における地域づくりなど、福島の問題を多様な課題と結びつけて考えることができた。また、学生が媒介となることで、コロナ禍を経て交流が薄れていた住民コミュニティの新たな交流機会を生み出すこともできた。学生たちにとっては、「悲惨さ」が強調されやすい福島の地で、コミュニティづくりに真剣に取り組む人々の姿は強く印象に残ったようだ。2 年目以降は、今回構築した関係を基礎に、遠方からできる支援・貢献のあり方についても模索していきたい。



プロジェクト名 **人が集い、読書を楽しむ図書館をつくる**

連 携 先 **交野市立図書館**

1. 活動実施の経緯

摂南大学は、昨年度より、現代社会学部「FAL 演習」の枠で交野市立図書館と連携して活動しています。今年度は、昨年度に引き続き、倉治図書館にて、読書推進・読書振興の一環として、プロジェクト参加学生による展示・イベントの企画を行いました。

2. 活動の内容

- ・夏休みに、図書館の仕事を体験する「インターン」に参加しました。
- ・また、学生たちの企画により、以下の活動を行いました。

A. 夏休みのイベント開催

「図書館丸ごと使って謎解き！」:図書館内にクイズを配置し、館内を回りながら謎解きをする企画。
「夏だ！ほいさ！交野かるただ！」:地域の子どもたちが大学生と遊べるイベント。かるたや折り紙などを行いました。

B. 展示企画

大学生のおすすめ本の展示:学生たちのおすすめ本それぞれ 3 冊ずつを夏休みに展示しました。
音楽本展示:文学作品からインスピレーションを得たポップ・ロックミュージックについて、元ネタとなった本、楽曲から生まれた本とともに展示しました。

C. 倉治図書館紹介動画の制作:ショート動画を作成し、トークイベントにて上映しました。この動画は図書館ホームページにて公開予定です。

D. トークイベント:活動報告と共に、図書館と本について、大学生の本音を参加者と語りました。

3. 活動を通じた成果と学び

交野市立倉治図書館と大学生が協力して企画、運営することで、子供たちの図書館への関心意欲の向上や将来的な図書館の新規利用者の増加に貢献することができました。また、図書館についての紹介動画の作成により、地域の人々の利用者増加に繋がるきっかけを作ることができました。

この活動を通じて、図書館の方々や地域の人々、トークイベントの参加者の方々などから様々なことを学びました。図書館でイベントを運営した際、地域の人々が多数参加していることから図書館が、地域の人々にとって重要な存在であるということを知りました。そして、イベントを企画する際や紹介動画を作成する際に、相手の立場や気持ちに寄り添うこと、様々な視点に立って考えることの必要性を学ぶ機会になりました。トークイベントを通じて、図書館や本、読書についての個々人の考え方や捉え方から多種多様な意見を理解することにより、新たな視点や考え方の発見に繋がることの重要性を知ることができました。

[参考資料]FAL(フィールド型アクティブ・ラーニング)科目の沿革

■2023 年度(令和 5 年度)

FAL(フィールド型アクティブ・ラーニング)科目は、2023年現代社会学部の設置とともにスタート。このうちFAL演習は、教員の調査研究フィールドや大学の近隣自治体などと連携にむけた協議を行い、初年度より41件のプロジェクトを実施することとなった。

- FAL委員会の設置(講師3名、助教2名)
- 中間報告会、成果報告会の実施
- 活動報告書の作成

【実施状況】プロジェクト数:41(50)件、参加学生数:210人

■2024 年度(令和 6 年度)

今年度は新たに、事前の情報提供やプロジェクトごとの説明会(任意)を「FAL WEEK」として開催した。また、全体キックオフミーティングおよびプロジェクトごとの顔合わせも行った。

- FAL委員会の継続(講師3名、助教2名)
- 中間報告会、成果報告会の実施
- 活動報告書の作成

【実施状況】プロジェクト数:45(51)件、参加学生数:373 人(キックオフ時)

2024年度 摂南大学現代社会学部 FAL 演習活動報告書

令和 7 年 3 月 31 日発行

発行所 摂南大学現代社会学部

〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17 番 8 号